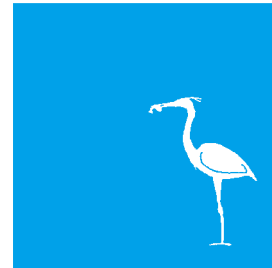


浦幌町立博物館

紀要

第24号



『浦幌町郷土博物館報告』創刊号～第45号
(1972～1996) 継続

BULLETIN OF THE HISTORICAL MUSEUM OF URAHORO

目次

荒川和子：浦幌町立博物館所蔵の2023年度採集の蝶標本	1
久保見幸・圓谷昂史・成田敦史・持田誠・澤村寛：北海道十勝郡浦幌町に分布する 根室層群の白亜紀／古第三紀（K/Pg）境界剥ぎ取り標本の作製記録	11
高宮颯太・山内健生：北海道十勝地方の草地における直翅目のファウナと多様性	17
〔調査記録〕	
持田誠：かつて浦幌で操業していたバット工場について — 聞き取り調査と関連資料 —	25
〔採集記録・観察記録〕	
円子紳一：浦幌のウチダザリガニ駆除（2021～23年）	37
〔資料紹介〕	
三浦直春・大和田努 解説：大正十五年・昭和元年 教育雑件 浦幌村役場〔その8〕	40
〔年報〕	
2022年度事業年報	55

2024

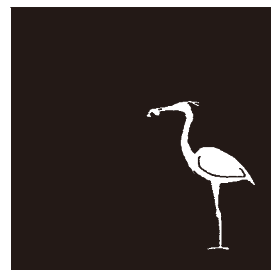
3

北海道
浦幌町立博物館

浦幌町立博物館

紀要

第24号



『浦幌町郷土博物館報告』創刊号～第45号
(1972～1996) 継続

BULLETIN OF THE HISTORICAL MUSEUM OF URAHORO

2024

3

北海道
浦幌町立博物館

浦幌町立博物館所蔵の2023年度採集の蝶標本

荒川和子¹⁾

Kazuko ARAKAWA, 2024. Butterfly 2023 collection of The Historical Museum of Urahoro

Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 24: 1-10

整理番号	受入番号	点数	計測値	採集地	採集年月日	採集者
アゲハチョウ科 Papilionidae						
ヒメウスバアゲハ(ヒメウスバシロチョウ) <i>Parnassius hoenei</i> (SCHWEITZER, 1912)						
1875	2024-15	1	54	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 6. 1	荒川和子
キアゲハ <i>Papilio machaon</i> LINNAEUS, 1758						
1876	2024-16	1	62	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 6. 1	荒川和子
1877	2024-17	1	80	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 6. 22	荒川和子
1878	2024-18	1	76	北海道十勝郡浦幌町豊北海岸	2023. 7. 26	荒川和子
1879	2024-19	2	80	北海道十勝郡浦幌町南町	2023. 8. 21	荒川和子
1880	2024-20	1	75	北海道十勝郡浦幌町南町	2023. 8. 24	荒川和子
1881	2024-21	1	77	北海道十勝郡浦幌町南町	2023. 8. 27	荒川和子
1882	2024-22	1	75	北海道十勝郡浦幌町南町	2023. 8. 28	荒川和子
シロチョウ科 Pieridae						
モンシロチョウ <i>Pieris rapae</i> (LINNAEUS, 1758)						
1883	2024- 1	1	47	北海道十勝郡浦幌町南町	2023. 6. 26	荒川和子
1884	2024- 2	2	47~50	北海道十勝郡浦幌町南町	2023. 7. 8	荒川和子
1885	2024- 3	1	47	北海道十勝郡浦幌町南町	2023. 8. 1	荒川和子
1886	2024-86	1	45	北海道十勝郡浦幌町桜町	2023. 11. 2	荒川和子
モンキチョウ <i>Colias erate</i> (ESPER, 1805)						
1887	2024- 4	1	44	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 5. 25	荒川和子
1888	2024- 5	2	45~56	北海道十勝郡浦幌町常豊信号所	2023. 7. 10	荒川和子
1889	2024- 6	1	45	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 8. 27	荒川和子
1890	2024- 87	1	47	北海道十勝郡浦幌町桜町	2023. 11. 2	荒川和子
エゾシロチョウ <i>Apoeia crataegi</i> (LINNAEUS, 1758)						
1891	2024- 7	1	68	北海道十勝郡浦幌町桜町	2023. 6. 15	荒川和子
1892	2024- 8	2	68~71	北海道十勝郡浦幌町桜町	2023. 6. 16	荒川和子
1893	2024- 9	2	66~71	北海道十勝郡浦幌町南町	2023. 6. 26	荒川和子
エゾスジグロシロチョウ <i>Pieris dulcinea</i> (BUTLER, 1882)						
1894	2024- 10	2	45~46	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 5. 17	荒川和子
1895	2024- 11	1	50	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 6. 8	荒川和子
スジグロシロチョウ <i>Pieris melete</i> (MÉNÉTRIÈS, 1857)						
1896	2024- 12	1	45	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 5. 17	荒川和子
1897	2024- 13	1	50	北海道十勝郡浦幌町南町	2023. 7. 27	荒川和子
エゾヒメシロチョウ <i>Leptidea morsei</i> (FENTON, 1882)						
1898	2024- 14	5	39~40	北海道十勝郡浦幌町常豊信号所	2023. 7. 10	荒川和子
セセリチョウ科 Hesperiiidae						
コチャバネセセリ <i>Thoressa varia</i> (MURRAY, 1875)						

1) 〒089-5617 北海道十勝郡浦幌町字南町

整理番号	受入番号	点数	計測値	採集地	採集年月日	採集者
1899	2024- 23	1	27	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 6. 20	荒川和子
1900	2024- 24	1	28	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 6. 21	荒川和子
1901	2024- 25	1	31	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 6. 22	荒川和子
オオチャバネセセリ <i>Polytremis pellucida</i> (MURRAY, 1875)						
1902	2024- 26	1	33	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 7. 5	荒川和子
1903	2024- 27	2	34~35	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 7. 8	荒川和子
1904	2024- 28	2	28~33	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 7. 10	荒川和子
1905	2024- 29	1	32	北海道十勝郡浦幌町南町	2023. 7. 13	荒川和子
コキマダラセセリ <i>Ochlodes venatua</i> (BREMER & GREY, 1852)						
1906	2024- 30	1	31	北海道十勝郡浦幌町南町	2023. 7. 8	荒川和子
ミヤマセセリ <i>Erynnis montanus</i> (BREMER, 1861)						
1907	2024- 31	1	36	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 6. 1	荒川和子
タテハチヨウ科 Nymphalidae						
ギンボシヒヨウモン <i>Speyeria aglaja</i> (LINNAEUS, 1758)						
1908	2024- 33	1	51	北海道十勝郡浦幌町平和塔	2023. 7. 23	荒川和子
1909	2024- 34	1	53	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 7. 8	荒川和子
1910	2024- 35	1	55	北海道十勝郡浦幌町東山	2023. 7. 8	荒川和子
1911	2024- 36	2	54~55	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 7. 23	荒川和子
ウラギンヒヨウモン <i>Fabriciana adippe</i> ([DENIS & SCHOFFERMÜLLER], 1775)						
1912	2024- 37	1	49	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 6. 22	荒川和子
オオウラギンスジヒヨウモン <i>Argyronome rulsana</i> (MOTSCHULSKY, 1866)						
1913	2024- 38	1	54	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 7. 23	荒川和子
ウラギンスジヒヨウモン <i>Argyrome laodice</i> (PALLAS, 1771)						
1914	2024- 39	1	52	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 9. 1	荒川和子
クモガタヒヨウモン <i>Nephargynnis anadyomene</i> (C. & R. FELDER, 1862)						
1915	2024- 40	1	58	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 6. 20	荒川和子
コヒヨウモン <i>Brenthis ino</i> (ROTTEMBURG, 1775)						
1916	2024- 41	3	45~50	北海道十勝郡浦幌町豊北海岸	2023. 7. 26	荒川和子
シータテハ <i>Polygonia c-album</i> (LINNAEUS, 1758)						
1917	2024- 42	1	50	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 6. 20	荒川和子
1918	2024- 43	1	45	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 7. 5	荒川和子
アカタテハ <i>Vanessa indica</i> (HERBST, 1794)						
1919	2024- 85	1	60	北海道十勝郡浦幌町南町	2023. 10. 31	荒川和子
コヒオドシ <i>Aglais urticae</i> (LINNAEUS, 1758)						
1920	2023- 44	1	45	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 7. 4	荒川和子
クジャクチョウ <i>Inachis io</i> (LINNAEUS, 1758)						
1921	2024- 45	1	50	北海道十勝郡浦幌町南町	2023. 8. 20	荒川和子
1922	2024- 46	2	45~52	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 7. 8	荒川和子
1923	2024- 47	1	55	北海道十勝郡浦幌町南町	2023. 8. 23	荒川和子
アカマダラ <i>Araschnia levana</i> (LINNAEUS, 1758)						
1924	2024- 52	1	32	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 5. 17	荒川和子
1925	2024- 54	1	31	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 5. 24	荒川和子
1926	2024- 55	1	35	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 7. 5	荒川和子
サカハチチョウ <i>Araschnia burejana</i> BREMER, 1861						
1927	2024- 53	1	33	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 5. 24	荒川和子
1928	2024- 56	1	46	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 6. 1	荒川和子
フタスジチョウ <i>Neptis rivularis</i> (SCOPOLI, 1763)						
1929	2024- 48	2	42~45	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 6. 20	荒川和子
1930	2024- 49	1	43	北海道十勝郡浦幌町平和塔	2023. 6. 22	荒川和子
イチモンジチョウ <i>Ladoga camilla</i> (LINNAEUS, 1764)						

整理番号	受入番号	点数	計測値	採集地	採集年月日	採集者
1931	2024- 50	1	45	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 6. 26	荒川和子
ミスジチョウ	<i>Neptis philyra</i>	MÉNÉTRIÈS, 1858				
1932	2024- 51	1	66	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 7. 8	荒川和子
コムラサキ	<i>Apatura metis</i>	FREYER, 1829				
1933	2024- 57	1	65	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 7. 23	荒川和子
ヤマキマダラヒカゲ	<i>Neope nipponica</i>	BUTIER, 1881				
1934	2024- 58	1	56	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 5. 24	荒川和子
1935	2024- 59	1	55	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 5. 25	荒川和子
1936	2024- 60	1	56	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 5. 31	荒川和子
1937	2024- 61	1	63	北海道十勝郡浦幌町宝町	2023. 6. 20	荒川和子
サトキマダラヒカゲ	<i>Neope goschkevitschii</i>	(MÉNÉTRIÈS, 1857)				
1938	2024- 62	1	60	北海道十勝郡浦幌町宝町	2023. 6. 26	荒川和子
シロオビヒメヒカゲ	<i>Coenonympha hero</i>	(LINNAEUS, 1761)				
1939	2024- 63	1	37	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 6. 1	荒川和子
クロヒカゲ	<i>Lethe diana</i>	(BUTLER, 1866)				
1940	2024- 68	1	40	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 6. 20	荒川和子
1941	2024- 69	1	42	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 6. 27	荒川和子
1942	2024- 70	1	45	北海道十勝郡浦幌町東山	2023. 7. 4	荒川和子
ヒメウラナミジャノメ	<i>Ypthima argus</i>	BUTLER, 1866				
1943	2024- 64	2	38~39	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 6. 20	荒川和子
1944	2024- 65	1	38	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 6. 21	荒川和子
1945	2024- 66	1	31	北海道十勝郡浦幌町常豊信号所	2023. 6. 21	荒川和子
1946	2024- 67	1	38	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 7. 5	荒川和子
ジャノメチョウ	<i>Minois dryas</i>	(SCOPOLI, 1763)				
1947	2024- 71	2	50~52	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 7. 23	荒川和子
1948	2024- 72	2	50~56	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 7. 25	荒川和子
シジミチョウ科 Lycaenidae						
コツバメ	<i>Callophrys ferrea</i>	(BUTLER, 1866)				
1949	2024- 73	1	26	北海道十勝郡浦幌町南町	2023. 5. 27	荒川和子
ベニシジミ	<i>Lycaena phlaeas</i>	(LINNAEUS, 1761)				
1950	2024- 32	1	25	北海道十勝郡浦幌町常豊信号所	2023. 7. 25	荒川和子
1951	2024- 84	1	35	北海道十勝郡浦幌町南町	2023. 10. 8	荒川和子
アカシジミ	<i>Japonica lutea</i>	(HEWITSON, 1865)				
1952	2024- 82	1	31	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 7. 25	荒川和子
エゾミドリシジミ	<i>Favonius jezoensis</i>	(MATSUMUEA, 1915)				
1953	2024- 80	7	31~36	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 7. 8	荒川和子
1954	2024- 81	2	34	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 7. 10	荒川和子
ツバメシジミ	<i>Everes argiades</i>	(PALLAS, 1771)				
1955	2024- 74	1	26	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 6. 1	荒川和子
1956	2024- 75	1	28	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 6. 8	荒川和子
1957	2024- 76	1	25	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 7. 25	荒川和子
1958	2024- 77	1	25	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2023. 7. 26	荒川和子
ウスイロオナガシジミ	<i>Antigius butleri</i>	(FENTON, 1889)				
1959	2024- 78	1	29	北海道十勝郡浦幌町東山	2023. 7. 4	荒川和子
ルリシジミ	<i>Celastrina argiolus</i>	(LINNAEUS, 1758)				
1960	2024- 79	1	26	北海道十勝郡浦幌町南町	2023. 7. 8	荒川和子
ゴマシジミ	<i>Maculinea teleius</i>	(BERGSTRÄSSER, 1779)				
1961	2024- 83	1	38	北海道十勝郡浦幌町豊北海岸	2023. 7. 26	荒川和子

参 考 文 献

- 志村 隆. 2007. 日本産蝶類標準図鑑. 336pp. 学習研究社, 東京.
- 堀 繁久・桜井正俊. 2015. 昆虫図鑑北海道の蝶と蛾. 422pp. 北海道新聞社, 札幌.
- 永盛俊行・永盛拓行・芝田 翼・黒田 哲・石黒 誠. 2018. 完本 北海道蝶類図鑑. 396pp. 北海道大学出版会, 札幌.
- 永盛俊行・芝田 翼・辻 規男・石黒 誠. 2020. 北海道の蝶. 414pp. 北海道大学出版会, 札幌.





コチャバネセセリ



オオチャバネセセリ



コキマダラセセリ



ミヤマセセリ



ギンボシヒョウモン



ウラギンヒョウモン



オオウラギンスジヒョウモン



ウラギンスジヒョウモン





フタスジチョウ



イチモンジチョウ



ミスジチョウ



コムラサキ



ヤマキマダラヒカゲ



サトキマダラヒカゲ



シロオビヒメヒカゲ



クロヒカゲ





北海道十勝郡浦幌町に分布する根室層群の白亜紀/古第三紀 (K/Pg) 境界剥ぎ取り標本の作製記録

久保見 幸¹⁾・圓谷昂史¹⁾・成田敦史¹⁾・持田 誠²⁾・澤村 寛³⁾

Koh Kubomi, Takafumi Enya, Atsufumi Narita, Makoto Mochida, and Hiroshi Sawamura:

Surface peel specimens of the Cretaceous / Paleogene (K/Pg) boundary of the Nemuro Group in Urahoro Town, Tokachi-gun, Hokkaido

Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 24

はじめに

約46億年の地球史の中で生物の「大量絶滅」とは、海洋動物の絶滅率変化を求めたとき、科のレベルで10%、属のレベルで20%以上 (Raup 1982) が約1,500万年以内 (Sepkoski 1982) に絶滅した場合と定義される (例えば, Raup and Sepkoski 1982; 海保 1992)。地球が大量絶滅を経験した時期は、オルドビス紀末 (約4億4,380万年前)、後期デボン紀 (フラニアン/ファメニアン) 境界 (約3億7,220万年前)、ペルム紀末 (約2億5,190万年前)、三畳紀/ジュラ紀境界 (約2億140万年前)、および白亜紀/古第三紀境界 (約6,600万年前) の5つである。その中でも、白亜紀 (K: 約1億4,500万年前~6,600万年前) /古第三紀 (Pg: 約6,600万年前~2,303万年前) 境界では、メキシコのユカタン半島周辺に直径約10 kmの巨大隕石が衝突したことにより、恐竜やアンモナイトなどの生物種が大量絶滅したとされている (Schulte *et al.*, 2010)。欧米などで確認されているK/Pg境界は黒色粘土層であり、多量のイリジウムやその他の白金族元素などを含み (Alvarez *et al.*, 1980)、衝撃石英なども報告されている (例えば, Montanari *et al.*, 1983)。K/Pg境界は、恐竜やアンモナイトの絶滅から哺乳類が繁栄する時代への転換期を保存する地層として非常に重要とされている。

Kaiho and Saito (1986) は、北海道十勝郡浦幌町北東部の川流布川支流の茂川流布川沿いに露出する根室層群川流布層上部泥岩部層 (彼らの区分では活平層上部に相当) の浮遊性有孔虫化石群集を検討した結果、炭質物に富む黒色粘土層がK/Pg境界に相当する可能

性を示した。また、この粘土層からは微量ではあるが、欧米のK/Pg境界から報告されているイリジウムも検出された (田崎ほか 1992)。このことから、北海道浦幌町で確認されたK/Pg境界は、東アジアでも唯一知られており、多くの先行研究においても重要視されてきた。

しかし、近年の台風などの自然災害が原因で、K/Pg境界を含む周辺の地層が露出している崖 (露頭) が徐々に後退するなどの被害が確認されている。この状況のままでは、地質学的に重要な情報が保存された地層が将来的に無くなってしまふことが危惧される。そこで今回は、露頭表面 (地層) を剥ぎ取り、博物館に標本として残すこととした。地層の剥ぎ取り技法は、露頭に接着剤を直接吹き付け、ガラス繊維や布などで裏打ちし、固化した後に露頭表面を薄く剥離させることによって地層を採取する手法である (例えば, 石浜 2017a, b)。地層の層序関係を実物のまま採取でき、かつ様々な場所に持ち運びが可能であるため、博物館展示や教育普及活動に活用できる。一方、地層の剥ぎ取りは、未固結な堆積物に対して行うことが一般的であるが、本研究で扱うK/Pg境界は固結しているため、これまでの剥ぎ取り技法でどこまで作製できるのかを模索しながら実施する必要があった。

本研究では、浦幌町の茂川流布川沿いに露出するK/Pg境界を後世まで保存し、博物館展示を通してその貴重な地質学的情報を伝えるために、茂川流布川周辺の根室層群のK/Pg境界の剥ぎ取り標本の作製を試みたので報告する。

1) 北海道博物館 研究部 自然研究グループ

2) 浦幌町立博物館

3) 足寄動物化石博物館

茂川流布川沿いの根室層群川流布層の概要

北海道十勝郡浦幌町北東部の白糠丘陵には、白亜系～古第三系根室層群、古第三系音別層や浦幌層、新第三系川上層群、および第四系が分布する（図1：西嶋 1964；栗原 2013）。白糠丘陵に分布する根室層群は、北海道十勝郡の仁生川、川流布川、浦幌川、および本別川沿いに露出し、川上層、川流布層、および富川層に区分される（図1：西嶋 1964）。川流布川支流の茂川流布川沿いには、川流布層上部泥岩部層が露出する（図2）。この上部泥岩部層は、黒色から灰色のシルト岩である。このシルト岩は塊状であり、細やかな割れ目（節理）が発達している。凝灰岩の薄層を数枚伴い、シルト岩中に数多くのコンクリーションを含む。また、シルト岩中には、Kaiho and Saito（1986）で示されたK/Pg境界に相当する黒色粘土層が狭在し、その上下に石灰岩層が存在する（図3）。本地域の川流布層は、産出する浮遊性有孔虫群集や底生有孔虫などの微化石類から、後期白亜紀マーストリヒチアン～古第三紀暁新世セラナンディアンに対比される（君波 2010）。近年、K/Pg境界層から約15 m下位の層準から異常巻きアンモナイト *Diplomoceras cylindraceum* の産出が報告された（Kurihara *et al.*, 2016）。K/Pg境界周辺の地質やその詳細については、栗原（2013）などに記載されているため、参照されたい。

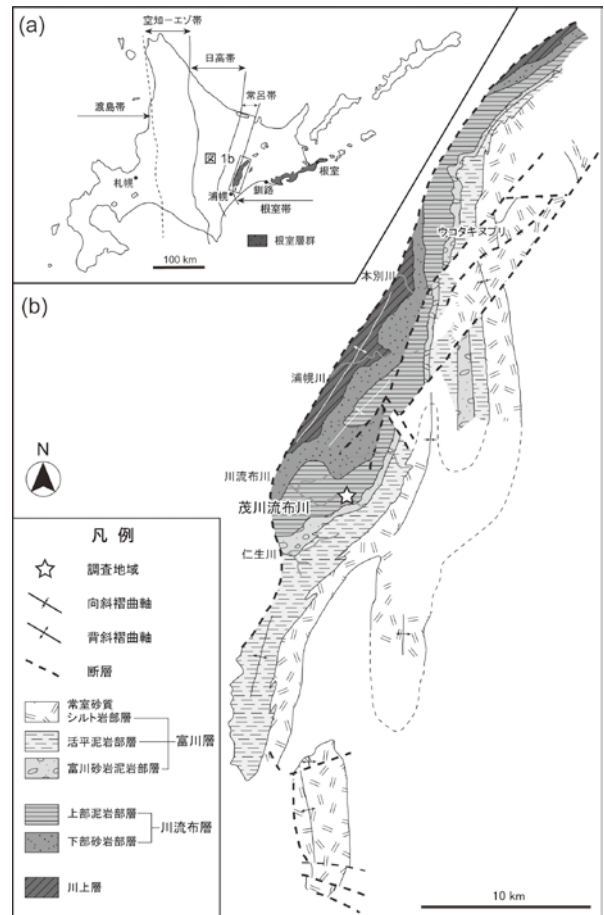


図1 a. 北海道の地帯区分図. Ueda (2016) を参考に作成. b. 白糠丘陵地域の地質図. 西嶋 (1964) およびKurihara *et al.* (2016) を参考に作成.



図2 茂川流布川の右岸沿いに露出するK/Pg境界の調査風景.

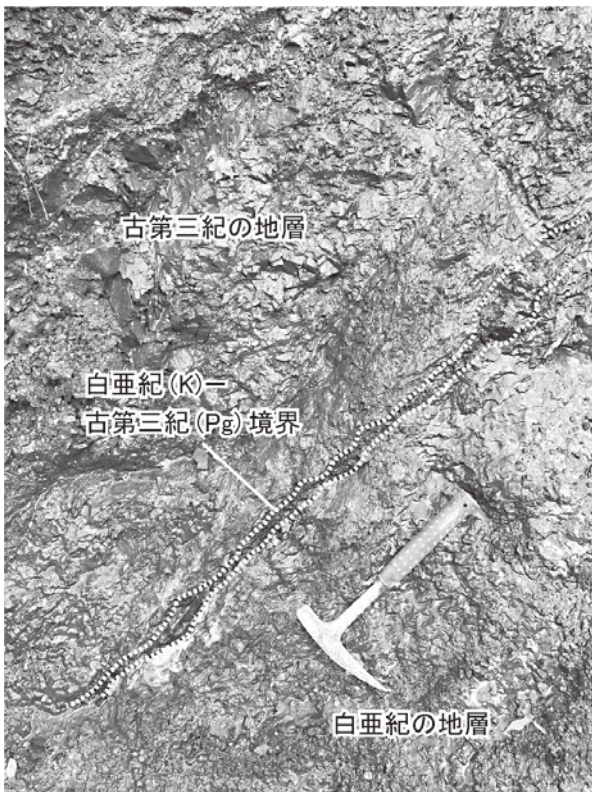


図3 K/Pg境界の露頭写真(左岸)。ハンマーの大きさは約28 cm.

K/Pg境界の剥ぎ取り標本の作製方法

K/Pg境界の剥ぎ取り標本の作製は、令和4(2022)年10月24日(月)～26日(水)の3日間の日程で実施した。作製方法は、添田ほか(2015)および石浜(2017b)を参考にした。地層の剥ぎ取り標本の作製に使用した代表的な道具は、表1にまとめてあるため参照された。

1 剥ぎ取りを実施する露頭面の選定

K/Pg境界は、茂川流布川の右岸と左岸の崖に好露出する。左岸の露頭は急傾斜であり、かつ大量の水が黒色粘土層から染み出しており、剥ぎ取り作業が困難と予想できたため、本研究では、右岸のなるべく平坦な面を剥ぎ取り位置に設定した。

2 剥ぎ取り面の整形

ハンマー、タガネ、刷毛、およびスコップを用いて、平滑になるように剥ぎ取り面を整えた。その後、剥ぎ取り面の水分量が少なかったため、霧吹きを用いて、水を噴霧した。これは、次の工程で塗付する接着剤であるウレタン系合成樹脂「トマックNS-10(三恒商事

株式会社)(以下、合成樹脂)」の硬化のためである。

3 合成樹脂の塗布・裏打ち材の貼り付け

水を噴霧した約30分後に、合成樹脂を刷毛で剥ぎ取り面に直接塗布した(図4a)。この際、塗りムラがないように丹念に作業した。なお、合成樹脂は有機溶剤のため、人体に直接触れないよう防護めがねやゴム手袋を着用し細心の注意を図った(図4a)。

合成樹脂が半乾きになった頃(約30分後)に、裏打ち材として「耐候性強化ポリプロピレン不織布(日本マタイ株式会社)(以下、不織布)」を貼り付けた(図4b)。不織布を貼り付けた後、その面に再度、合成樹脂を重ね塗りした(図5a)。この際、合成樹脂と不織布に隙間ができないように刷毛などで適度に叩き、空気を抜きながら、剥ぎ取り面の凹凸と一体化させ、剥ぎ取り面に定着していない部分には、不織布に釘を刺して固定させ、約4時間～半日放置し乾燥させた(図5b)。乾燥させている間に、K/Pg境界周辺の地質調査を実施した。

4 剥ぎ取り作業と補修用の岩石採取

合成樹脂を十分に乾燥させた後、剥ぎ取った後に層序の上下を判別できるよう、張り付けた不織布に油性マジックで目印を付けた。次に、不織布ごと剥ぎ取り面の岩石を慎重に剥ぎ取った。白亜紀および古第三紀の岩石(特に石灰岩の部分)は固結度が高く、剥ぎ取りが困難な部分が多かったため、ハンマー、ボールおよびタガネを用いて、慎重に作業を行った(図6)。このとき、次の剥ぎ取りを行うことも考慮し、できるだけ剥ぎ取り面を破壊しすぎないように注意した。なお、上記の作業を慎重に実施したものの、岩石が剥落してしまった部分が数箇所存在したので、白亜紀、K/Pg境界、古第三紀の各層準から補修用の岩石を採取した。

表1 地層の剥ぎ取り標本の作製に使用した代表的な道具

名称		名称	
1	合成樹脂(トマックNS-10)	11	地質調査用ハンマー
2	裏打ち材(不織布)	12	タガネ
3	水	13	ボール
4	目盛り付き容器	14	スコップ
5	刷毛	15	バケツ
6	薄手のビニール手袋	16	シャベル
7	ゴム手袋	17	釘
8	マスク	18	コンベックス
9	簡易ゴーグル	19	油性マジック
10	霧吹き	20	大型ゴミ袋



図4 a. K/Pg境界の露頭表面に合成樹脂を塗布している様子。
b. 裏打ち材として不織布を貼り付けた様子。



図5 a. 不織布に合成樹脂を重ね塗りする様子。
b. 不織布に釘を刺して固定させ、乾燥させている様子。



図6 ハンマーやバールを用いて、慎重に剥ぎ取る様子。

K/Pg境界の剥ぎ取り標本の記載

この3日間で剥ぎ取った標本は、剥ぎ取り面の横幅約30 cm、縦幅約42 cmのサイズが3枚および横幅約42 cm、縦幅約60 cmのサイズが2枚の計5枚である。その中でも特に、図7aの地層の剥ぎ取り標本では、白亜紀層、K/Pg境界、および古第三紀層を構成する

黒色粘土、シルト岩、および石灰岩の全てを連続的にかつ綺麗に剥ぎ取ることができた。この標本の大きさは、横幅約30 cm、縦幅約46 cmである。図7aの剥ぎ取り標本から読み取った地質柱状図(図7b)によると、この剥ぎ取り標本の全層厚は約36 cmである。この層厚は本調査によって得られた走向・傾斜の値をもとに、真の厚さを再計算した。白亜紀の地層は、黒色

から灰色の極細粒～細粒のシルト岩であり、剥ぎ取った層厚は約14 cmである。白亜紀層の上には厚さ約5 cmの石灰岩がレンズ状に存在する。K/Pg境界は、粒子がほとんど見えない極細粒の黒色の粘土であり、剥ぎ取った層厚は約3 cmである。この黒色粘土の一部には小球粒状の黄鉄鉱が含まれていた。古第三紀の地層は、黒色から灰色の極細粒のシルト岩であり、剥ぎ取った層厚は約14 cmである。K/Pg境界の層準に近い古第三紀の地層は、黒色から灰色を呈し、下位の白亜紀やK/Pg境界の地層との岩相の区別が付きにくい。

本調査における剥ぎ取り技法の工夫と課題

1 合成樹脂の塗布・裏打ち材の貼り付け

合成樹脂の塗布の際、第四紀の比較的未固結な堆積物などを剥ぎ取る際には、合成樹脂とアセトン $1:1$ の割合で調合して使用する場合がある(添田ほか2015)。これは、合成樹脂をアセトンで希釈すると粘性が低くなり、剥ぎ取り面に浸透しやすくなることで、地層を厚く剥ぎ取るためである。しかし、今回の地層は固結度が高いこと、また剥ぎ取り面が微傾斜しており、合成樹脂が剥ぎ取り面に定着しないことを考慮して、希釈しなかった。

裏打ち材の貼り付けにおいて、当初、地層の剥ぎ取りで用いられる寒冷紗を使用したものの、今回の露頭面は岩石の凹凸が顕著であり、寒冷紗では剥ぎ取り面の定着が十分ではなかったため、岩石にフィットしやすく柔らかい不織布を裏打ち材に採用した。また、今回は固結した地層であり、竹串が刺さらなかったため、釘を用いて不織布を固定させた。

2 地層の剥ぎ取り

今回は、10月に剥ぎ取りを行ったため、日中の最高気温が約6度と低温であり、樹脂の乾燥に半日ほど時間がかかってしまった。また、今回の地層は固結度が高く、ハンマーやボールを用いて剥ぎ取ると、岩石がブロック状に剥ぎ取られ、剥ぎ取り面にムラができ、適切な厚さに調整することが難しかった。

また、24日から25日の夜間を通して半日間放置して乾燥させている間、小動物に荒らされた形跡があったため、それ以後、剥ぎ取り面をプラスチック製のかごでおおって対策した。原因を突き止めることは難しいが、おそらく合成樹脂が微かに芳香族系の甘い香りがするため、その匂いに近寄ってきたと考えられる。今後、剥ぎ取り標本を作製する季節や温湿度条件、動物への対策も考慮した上で実施していく必要がある。

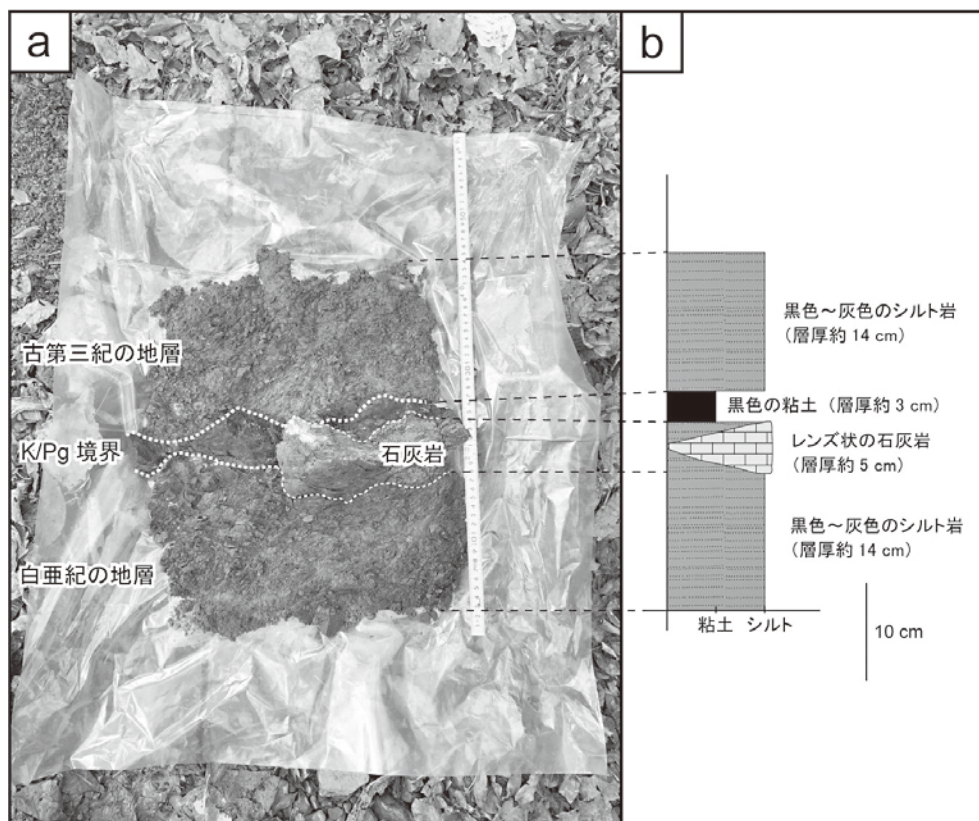


図7 a. 採取したK/Pg境界層の剥ぎ取り資料. b. K/Pg境界層の剥ぎ取り標本から読み取った詳細な地質柱状図.

おわりに

本研究では、一般的な地層の剥ぎ取り技法をもとに、固結度の高いK/Pg境界の剥ぎ取り方法を模索しながら試みた結果、K/Pg境界およびその上下の地層を綺麗に剥ぎ取ることができた。今後は、剥落した岩石の部分を補修用岩石で随時修正し、収蔵、展示およびその活用方法を模索していく。また、今回のように自然災害などの影響により、現地保存が困難な露頭が消失してしまうことを防ぐため、剥ぎ取り技法を用いた研究を継続して、標本の集積にも努めていきたい。

謝辞

浦幌町のK/Pg境界の剥ぎ取りや地質調査の実施に際して、浦幌町立博物館の佐藤亘館長に便宜を図っていただいた。道有林における地質調査に関しては、北海道十勝総合振興局森林室の許可を得た。また、地層の剥ぎ取り標本の作製に際して、北海道博物館総務部総括グループ藤田竜太主査に大変お世話になった。地層の剥ぎ取りの技法や展示法に関しては、神奈川県生命・地球の星博物館の石浜佐栄子主任学芸員および西澤文勝学芸員にご教示していただいた。以上の方々に、ここに記して厚く御礼を申し上げる。なお本研究は、北海道博物館調査研究プロジェクト（石狩低地帯北部地域を中心とした新生代の古環境復元Ⅱ）を使用した。

引用文献

- Alvarez, L. W., Alvarez, W., Asaro, F. and Michel, H. V., 1980. Extraterrestrial cause for the Cretaceous-Tertiary extinction. *Science* 208:1095-1108.
- 石浜佐栄子, 2017a. 日本の自然史博物館における地層剥ぎ取り標本の収集・登録・保管・活用の現状について. 神奈川県立博物館調査研究報告(自然) 15:1-6.
- 石浜佐栄子, 2017b. 露頭の前状保存のための地層剥ぎ取り・型取り・切り取り技法について. 神奈川県立博物館調査研究報告(自然) 15:13-20.
- 西嶋 進, 1964. 北海道十勝・釧路国境地域の最上部白堊系の層序. 石油技術協会誌 29:93-99.
- 海保邦夫, 1992. 大量絶滅(用語解説). 地球科学 46:243-245.
- Kaiho, K. and Saito, T., 1986. Terminal Cretaceous Sedimentary Sequence recognized in the northernmost Japan based on Planktonic Foraminiferal Evidence. *Proceedings of the Japan Academy, Series B* 62:145-148.
- 君波和雄, 2010. 2. 3 前弧海盆堆積帯, 2. 3. 4C. 白糠丘陵地域の根室層群. 日本地質学会(編), 日本地方地質誌1「北海道地方」pp. 85. 朝倉書店, 東京.
- 栗原憲一, 2013. 北海道十勝郡浦幌町に分布する根室層群川流布累層中の白亜紀/古第三紀境界. 浦幌町立博物館紀要 13:25-30.
- Kurihara, K., Kano, M., Sawamura, H., and Sato, Y., 2016. The last surviving ammonoid at the end of the Cretaceous in the north Pacific region. *Paleontological Research* 20: 116-120.
- Montanari, A., Hay, R.L., Alvarez, W. *et al.*, 1983. Spheroids at the Cretaceous-Tertiary boundary are altered impact droplets of basaltic composition. *Geology* 11:668-671.
- Raup, D. M., 1982. Biogeographic extinction: a feasibility test. 190: pp 277-281. *In Geological implications of impacts of large asteroids and comets on the Earth.*
- Raup, D. M. and Sepkoski, J. J., Jr., 1982. Mass extinctions in the marine fossil record. *Science* 215:1501-1503.
- Schulte, P., Alegret, L., Arenillas, I. *et al.*, 2010. The Chicxulub Asteroid Impact and Mass Extinction at the Cretaceous-Paleogene Boundary. *Science* 327:1214-1218.
- Sepkoski, J. J. Jr., 1982. Mass extinctions in the Phanerozoic oceans: a review. 190: pp 283-289. *In Geological implications of impacts of large asteroids and comets on the Earth.*
- 添田雄二・西村裕一・中村有吾, 2015. 浦幌町で実施した地層剥ぎ取り標本の作製について. 浦幌町立博物館紀要 15:49-56.
- 田崎和江・新谷美智・矢野倉実・海保邦夫・野田修司, 1992. K-T境界における粘土鉱物の特異性とイリジウム. 粘土科学 32:86-96.
- Ueda, H., 2016, Hokkaido. pp 201-221. *In* Moreno, T., Wallis, S. R., Kojima, T. and Gibbons, W., eds., *The Geology of Japan*, Geological Society, London

北海道十勝地方の草地における直翅目のファウナと多様性

高宮颯大・山内健生*

Sohta Takamiya and Takeo Yamauchi, 2024. Orthopteran fauna and diversity on grasslands in Tokachi District, Hokkaido, Japan

Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 24: 17-24.

Abstract.

Orthopteran habitats were surveyed mainly in artificial and semi-natural grasslands in Tokachi District, Hokkaido, Japan. As a result, 23 orthopteran species were recorded from nine survey sites. Among 23 species, *Chorthippus fallax strelkovi* and *Glyptobothrus maritimus maritimus* (Orthoptera: Acrididae) were collected from many survey sites and their abundance was high. Hence, they are the dominant species of grassland orthoptera in Tokachi District. Diversity indices were calculated for each survey site to determine the impact of mowing on orthoptera. The highest diversity index was found in Nukabira, where mowing was not carried out. On the other hand, the diversity indices of “Obihiro no Mori B” and the Tokachi River bank, where grass is mown at least once a year, were relatively higher than those of the study sites other than Nukabira, where grass is not mown. Namely, orthopteran diversity in grasslands that were not mown was not necessarily high. *Oecanthus longicauda* (Orthoptera: Gryllidae) was not collected in survey sites where grass was mown more than once a year, suggesting that mowing may disturb their habitat. Comparison of orthopteran species composition in semi-natural grasslands showed variation between survey sites, regardless of whether the grass was mown or not.

Key words: Orthoptera, insect conservation, species richness, dominant species, grassland management

諸言

草地生態系は農畜産業にとって欠かせない家畜や飼料等の生産機能とともに、温暖化抑制、土壌保全、生物多様性の保全、草地景観の維持、アニマルウェルフェアなど様々な機能を有している（農林水産省，2009；下田，2010）。しかしながら、日本は世界でも有数な森林国であるため、草地景観はあまり注目されてこなかった（陳ら，2005）。明治時代以降、日本における草地の面積は大きく減少し（陳ら，2005；井上，2007）、草地性の動植物が絶滅の危機に瀕している（大窪，2002）。

草地生態系において草地性昆虫は鳥類などのより高次の消費者のエサ資源として非常に重要である（吉尾ら，2009）。一方、湿潤な環境の日本では極相群集として森林が成立しやすく自然草地はほとんど見られない（陳ら，2005；Ushimaru et al., 2018）。したがって、日本における草地性昆虫の保全には人工草地や半自然草地が大きく貢献すると思われる。

直翅目（バッタ目）は、北海道十勝地方では上士幌町から9科26種（須田，2015）、新得町から3科7種（西島・小野，1982）などの記録がある。北海道に分布する直翅目のうち原野・草地・湿原を主な生息環境としている種は全体の約80%である（西島，1990）。北海道における草地や原野といった環境は、開発による影響を強く受けるため、草地性直翅目の生息環境の悪化が懸念されてきた（西島，1989）。一方で、十勝地方における直翅目の調査は2000年代初頭以降、森林の周辺環境でしか行われておらず（須田，2015；田中，2022）、人工草地や半自然草地といった草地環

* 帯広畜産大学昆虫学研究室

〒080-8555 北海道帯広市稲田町西2線11番地

* Laboratory of Entomology, Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine,

Inada-cho Nishi 2-11, Obihiro, Hokkaido 080-8555, Japan

E-mail: tyamauchi@obihiro.ac.jp

境における直翅目の生息状況は不明瞭であった。

直翅目は草地を代表する植食性昆虫であり、草地生態系における非常に重要な一次・二次消費者である (Ingrisch & Köhler, 1998)。また、日本における直翅目の生息状況に関する研究は都市域の緑地で行われることが多く (養父ら, 2000; 板川ら, 2010; 根津ら, 2011)、農村環境を対象としたものは多くない (Uchida & Ushimaru, 2014 吉尾ら, 2009)。人工草地、半自然草地において直翅目のような草地性昆虫の生息状況を調査することは、農村環境における生物多様性や環境の保全といった観点から意義のあることである。そこで本研究では、十勝地方の人工草地、半自然草地における直翅目の生息状況を調査し、直翅目の多様性や種構成を調べた。

材料と方法

1) 調査地

北海道十勝管内に調査地を設定し、人間により造成され農業に利用されていない草地を半自然草地、人間により造成され農業に利用されている、あるいは利用されていた草地を人工草地、自然に成立している草地

を自然草地と定義した。上記の定義に基づき、半自然草地の調査地は、帯広の森の陸上自衛隊十勝飛行場に近く航空法によって樹木の高さが制限されているエリア (以降、帯広の森A)、士幌高原ヌブカの里 (以降、ヌブカの里)、糠平源泉郷 (以降、糠平)、帯広の森の植樹地 (以降、帯広の森B)、十勝川河川敷の5か所を選定した。一方で、人工草地の調査地は、八千代公共育成牧場 (以降、八千代牧場)、帯広の森の採草地状の管理がなされている区画 (以降、帯広の森C)、帯広畜産大学の耕作放棄された実験圃場 (以降、帯広畜産大学) の3か所を選定した。また、自然草地の調査地としてトイトッキ浜の海岸草地 (以降、トイトッキ浜) の1か所を選定した。各調査地が位置する市町村名と緯度・経度を表1に示した。

各調査地の優占種と土地利用によって草地タイプを分類した。草刈りの有無は聞き取り調査または調査時の状況から把握した。選定した半自然草地の調査地において、帯広の森B及び十勝川河川敷の2地点は年一回以上の草刈りが行われており、その他の調査地は草刈りが行われていない。調査地ごとの標高や優占種 (目視による被度が最も高かった植物) などの詳細は表2に示した。



図1 調査地。1: 帯広の森A, 2: ヌブカの里, 3: 糠平, 4: 帯広の森B, 5: 十勝川河川敷, 6: 八千代牧場, 7: 帯広の森C, 8: 帯広畜産大学, 9: トイトッキ浜

表1 調査地が位置する市町村と緯度・経度

番号	調査地	市町村名	緯度・経度
1	帯広の森A	帯広市	42° 89'58.2"N, 143° 14'84.8"E
2	ヌプカの里	士幌町	43° 24'23.8"N, 143° 12'00.9"E
3	糠平	上士幌町	43° 36'56.1"N, 143° 19'86.0"E
4	帯広の森B	帯広市	42° 90'24.9"N, 143° 15'00.7"E
5	十勝川河川敷	音更町	42° 93'91.1"N, 143° 22'30.9"E
6	八千代牧場	帯広市	42° 73'54.2"N, 142° 97'02.4"E
7	帯広の森C	芽室町	42° 89'98.3"N, 143° 11'66.2"E
8	帯広畜産大学	帯広市	42° 86'72.6"N, 143° 17'10.7"E
9	トイトッキ浜	豊頃町	42° 70'77.9"N, 143° 68'14.9"E

表2 調査地の草地タイプと標高

番号	調査地	タイプ	草刈り	調査日	植生の優占種	標高(m)
1	帯広の森A	半自然草地	なし	7月21日, 9月14日	オオアワダチソウ	78
2	ヌプカの里	半自然草地	なし	8月22日, 10月9日	中茎イネ科植物	640
3	糠平	半自然草地	なし	8月28日, 10月3日	中茎イネ科植物	530
4	帯広の森B	半自然草地	年一回以上	7月21日, 9月14日	低茎イネ科植物	60
5	十勝川河川敷	半自然草地	年一回以上	7月27日, 9月10日	低茎イネ科植物	34
6	八千代牧場	人工草地(放牧地)	年一回以上	7月15日	高茎イネ科植物	249
7	帯広の森C	人工草地(採草地)	年一回以上	9月25日	低茎イネ科植物	77
8	帯広畜産大学	人工草地(耕作放棄地)	なし	9月15日	オオアワダチソウ	76
9	トイトッキ浜	自然草地	なし	6月28日, 8月21日	ハマナス	2.7

2) 調査方法

直翅目の調査方法として、調査地をランダムに歩き回る目撃確認法（1調査地あたり40分間）とスイーピング法（1調査地あたり15分間）を用い、調査地ごとに直翅目の種数及び個体数を記録した。スイーピングは草地での直翅目の調査において最もよく用いられる方法であり、これら2つの調査方法は比較的容易に行えることから（Gardiner et al., 2005）、今回はこの2つの調査方法を採用した。スイーピングには自作した捕虫網（口径47cm, 網の深さ90cm, 全長106cm）を用いた。調査は2021年6月下旬から10月上旬の晴れた日の10時から15時の間に上記の方法で半自然草地、自然草地で各2回、人工草地で各1回実施した。半自然草地、自然草地では、1回目の調査日より30日以上経過してから2回目の調査を行った。多くの直翅目が成虫として活動する夏から秋にかけて調査期間を設定したため、草刈りが行われている調査地での調査は全て草刈り後に行われた。スイーピングにより採集された直翅目はすべて研究室に持ち帰り、乾燥標本また

は70%エタノール液浸標本にした。直翅目は種類によって鳴き声に非常に大きな特徴を有しているため、直翅目の生息状況調査ではその鳴き声を利用されることもあるが、今回の調査では利用しなかった。

種の同定は日本直翅類学会(2006)に従って行った。また、正確な種同定が困難であった幼体は属レベルの同定にとどめた。

設定した半自然草地、人工草地、自然草地の調査地では直翅目の多様性を調べるためにSimpsonの多様性指数、 $1 - \lambda = 1 - \sum_{i=1}^S Pi^2 = 1 - \sum_{i=1}^S \left(\frac{ni}{N}\right)^2$ $0 \leq 1 - \lambda < 1$ （S, 種数; ni, i番目の種の個体数; N, 全個体数）とShannon-Weaver関数による多様性指数（H'）、 $H' = -\sum_{i=1}^S Pi \log_2 Pi = -\sum_{i=1}^S \frac{ni}{N} \log_2 \frac{ni}{N}$ $0 \leq H' < \infty$ （S, 種数; ni, i番目の種の個体数; N, 全個体数）を求めた（大垣, 2008）。多様性指数の算出にはスイーピングによって得られたデータ（調査2回の結果の平均値）を用いた。これらの統計解析には多様性・類似度計算機（<https://calc-species.herokuapp.com>）を用いた。

結果

今回の調査で6科23種の直翅目が確認された。このうち、スーピングによる調査では22種301個体が採集された。スーピングによる直翅目の採集個体数を表3に示した。採集された個体数が最も多かったのはエゾコバネヒナバッタ *Chorthippus fallax strelkovi* で全体の26.1%を占めた。次いで多かったのがヒナバッタ *Glyptobothrus maritimus maritimus* の23.9%で、その他の20種では採集された個体数が総個体数の20%を超える種はなかった(図2)。ヒナバッタはヌプカの里を除くほぼ全ての調査地で採集された。幼虫のた

め同定困難であったササキリ属の一種を除き、シバズ *Polionemobius mikado*、イブキヒメギス *Eobiana japonica*、サツポロフキバッタ *Podisma sapporensis*、ミカドフキバッタ *Parapodisma mikado*、コバネイナゴ *Oxya yezoensis*、トノサマバッタ *Locusta migratoria* の6種は1つの調査地からのみ採集された。

全ての調査地において、目撃確認法で記録した種はほぼ全てスーピングにより採集できたが、八千代牧場で目撃確認法によって記録したエゾスズ *Pteronemobius yezoensis* のみスーピングでは採集されなかった(表4)。

表3 スーピングによる直翅目の採集個体数

和名	学名	半自然草地*			人工草地			自然草地*
		帯広の森A	ヌプカの里	糠平	帯広の森B	十勝川河川敷	八千代牧場	帯広畜産大学
キリギリス科	Tettigoniidae							
ハネナガキリギリス	<i>Gampsocleis ussuriensis</i>	-	-	0.5	0.5	-	-	-
イブキヒメギス	<i>Eobiana japonica</i>	-	-	3	-	-	-	-
コバネヒメギス	<i>Chizuella bonnei</i>	0.5	1	-	-	-	-	-
ヒメクサキリ	<i>Ruspolia dubia</i>	-	-	-	-	-	1	1
ウスイロササキリ	<i>Conocephalus chinensis</i>	0.5	-	-	0.5	-	5	-
ササキリ属の一種**	<i>Conocephalus</i> sp.	-	-	-	-	-	-	0.5
ツユムシ科	Phaneropteridae							
ツユムシ	<i>Phaneroptera falcata</i>	-	-	-	-	0.5	1	-
マツムシ科	Encopteridae							
カンタン	<i>Oecanthus longicauda</i>	4	-	-	-	-	-	3
ヒバリモドキ科	Trigonidiidae							
マダラスズ	<i>Dianemobius nigrofasciatus</i>	-	-	1.5	0.5	0.5	-	-
シバズ	<i>Polionemobius mikado</i>	-	-	-	-	0.5	-	-
ヒシバッタ科	Tetrigidae							
ハラシシバッタ	<i>Tetrix japonica</i>	-	8	3	1	3	9	1
バッタ科	Acrididae							
サツポロフキバッタ	<i>Podisma sapporensis</i>	-	-	1	-	-	-	-
ミカドフキバッタ	<i>Parapodisma mikado</i>	-	-	-	-	-	3	-
ハネナガフキバッタ	<i>Ognevia longipennis</i>	-	-	6.5	-	0.5	-	-
コバネイナゴ	<i>Oxya yezoensis</i>	-	-	-	-	-	-	9
ナキイナゴ	<i>Mongolotettix japonicus</i>	1	1.5	-	-	1.5	-	-
ヒザグロナキイナゴ	<i>Podismissus genicularibus</i>	1.5	0.5	-	-	-	-	-
ヒナバッタ	<i>Glyptobothrus maritimus maritimus</i>	5	-	1.5	3	6	3	1
エゾコバネヒナバッタ	<i>Chorthippus fallax strelkovi</i>	-	23	3.5	1	-	24	2
イナゴモドキ	<i>Mecostethus parapleurus</i>	-	-	0.5	1.5	-	10	-
トノサマバッタ	<i>Locusta migratoria</i>	-	-	-	-	0.5	-	-
クルマバッタモドキ	<i>Oedaleus infernalis</i>	-	-	-	-	2	-	1
合計個体数		12.5	34	21	8	15	55	4

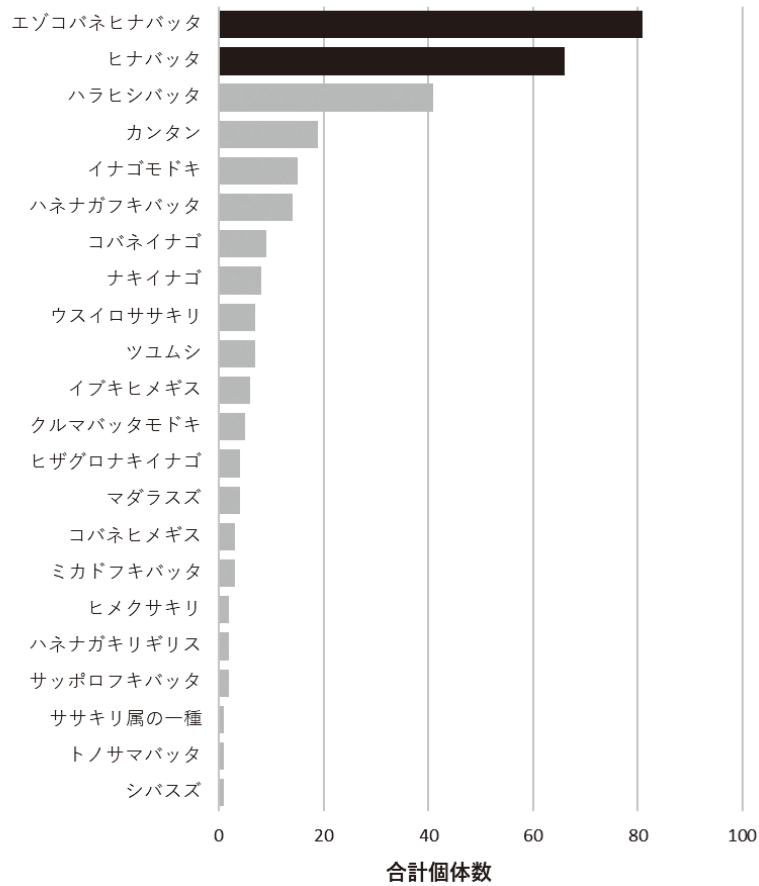


図2 スイープングにより採集された直翅目の合計個体数 (■：採集された個体数が全体の20%を超えた種)

表4 目撃確認法によって記録された直翅目

和名	学名	調査地
キリギリス科		
ハネナガキリギリス	<i>Gampsocleis ussuriensis</i>	糠平, 帯広の森B
イブキヒメギス	<i>Eobiana japonica</i>	糠平
コバネヒメギス	<i>Chizuella bonneti</i>	帯広の森A, ヌブカの里
ヒメクサキリ	<i>Ruspolia dubia</i>	帯広の森C, 帯広畜産大学
ウスイロササキリ	<i>Conocephalus chinensis</i>	帯広の森A, 帯広の森B, 八千代牧場
ササキリ属の一種	<i>Conocephalus</i> sp.	トイトツキ浜
ツユムシ科		
ツユムシ	<i>Phaneroptera falcata</i>	十勝川河川敷, 八千代牧場, トイトツキ浜
マツムシ科		
カンタン	<i>Oecanthus longicauda</i>	帯広の森A, 帯広畜産大学, トイトツキ浜
ヒバリモドキ科		
エゾスズ	<i>Pteronemobius yezoensis</i>	八千代牧場
マダラスズ	<i>Dianemobius nigrofasciatus</i>	糠平, 帯広の森B, 十勝川河川敷
シバズ	<i>Polionemobius mikado</i>	十勝川河川敷
ヒシバッタ科		
ハラヒシバッタ	<i>Tetrix japonica</i>	ヌブカの里, 糠平, 帯広の森B, 十勝川河川敷, 八千代牧場, 帯広畜産大学
バッタ科		
サッポロフキバッタ	<i>Podisma sapporensis</i>	糠平
ミカドフキバッタ	<i>Parapodisma mikado</i>	八千代牧場
ハネナガフキバッタ	<i>Ognevia longipennis</i>	糠平, 十勝川河川敷
コバネイナゴ	<i>Oxya yezoensis</i>	帯広畜産大学
ナキイナゴ	<i>Mongolotettix japonicus</i>	帯広の森A, ヌブカの里, 十勝川河川敷
ヒザグロナキイナゴ	<i>Podisimosis genicularibus</i>	帯広の森A, ヌブカの里
ヒナバッタ	<i>Glyptobothrus maritimus maritimus</i>	帯広の森A, 糠平, 帯広の森B, 十勝川河川敷, 八千代牧場, 帯広の森C, 帯広畜産大学, トイトツキ
エゾコバネヒナバッタ	<i>Chorthippus fallax strelkovi</i>	ヌブカの里, 糠平, 帯広の森B, 八千代牧場, 帯広の森C
イナゴモドキ	<i>Mecostethus parapleurus</i>	糠平, 帯広の森B, 八千代牧場, 帯広畜産大学
トノサマバッタ	<i>Locusta migratoria</i>	十勝川河川敷
クルマバッタモドキ	<i>Oedaleus infernalis</i>	十勝川河川敷, 帯広畜産大学

表5 各調査地における直翅目の採集個体数, 種数, 多様度指数

	帯広の森A	ヌプカの里	糠平	帯広の森B*	十勝川河川敷*	八千代牧場	帯広の森C*	帯広畜産大学
総個体数	25	68	42	16	30	55	4	19
種数	6	5	9	7	9	7	3	7
Simpsonの多様度指数	0.71	0.48	0.82	0.78	0.77	0.74	0.62	0.71
Shannon-Wiener H'	2.08	1.31	2.77	2.48	2.53	2.27	1.5	2.25

* : 草刈り有り

半自然草地の調査地において, スイーピングによって採集された直翅目の種数は糠平と十勝川河川敷の9種が最も多かった。一方で, 人工草地の調査地では八千代牧場と帯広畜産大学の7種が最も多かった。

調査地ごとに算出した多様度指数は, 糠平がもっとも高くなり, ヌプカの里がもっとも低くなった(表5)。年一回以上の草刈りが行われている帯広の森Bと十勝川河川敷は比較的高い多様度指数を示した。一方で, 人工草地の調査地では育成牛の放牧地として利用されている八千代牧場がもっとも高い多様度指数を示した。また, 自然草地であるトイトツキ浜では, 2回の調査でスイーピングにより4種42個体の直翅目を採集し, Simpsonの多様度指数は0.5, Shannon-Weaver関数による多様度指数(H')は1.34となった。

考察

1) 北海道十勝地方の草地における直翅目相

今回の調査で6科23種の直翅目を確認し, 十勝地方の草地における直翅目相がはじめて明らかになった。採集された直翅目のうち, ヒナバッタはヌプカの里を除くほぼ全ての調査地で採集され採集個体数が二番目に多かった。一方で, エゾコバネヒナバッタは採集された調査地がヒナバッタよりは少ないものの, 採集個体数はもっとも多かった。今回の調査結果からヒナバッタとエゾコバネヒナバッタは十勝地方の草地性直翅目の優占種であると考えられる。また, エゾコバネヒナバッタはイネ科植物の多い草地や湿原といった環境を好み, 日本国内では北海道と北東北の一部の地域に分布する北方系の種であるため(西島, 1990), 調査地の中で標高が比較的高い調査地から多くの個体が採集されたと考えられる。よって, 本種は北海道十勝地方において標高が比較的高い草地でより優占的になる可能性がある。

今回の調査において, 一部の調査地でイブキヒメギスやフキバッタの仲間といった林縁環境を好み必ずし

も草地性とはいえない直翅目(西島, 1990)も採集された。これらが多く採集された調査地は, 隣接する森林環境が直翅目の種構成に反映したと考えられる。

2) 直翅目の多様性と草地管理

直翅目は草地生態系においてクモ類や鳥類など多くの捕食者の重要なエサ資源であり(Ingrisch & Köhler, 1998), 現在多くの温帯地域でその多様性が減少しているため(Steck et al., 2007), 草地性直翅目の保全は急務であると考えられる。

半自然草地の調査地において, 最も高い多様度指数を示したのは糠平であった。糠平は, 採集された直翅目の種数は調査地の中で最も多かったが, 草地性の直翅目の他にハネナガフキバッタ *Ognevia longipennis* のような森林環境を好む直翅目が(西島, 1990), 他の調査地より多く採集されたため多様度指数に影響を与えた可能性がある。年一回以上の草刈りが行われている帯広の森Bと十勝川河川敷の多様度指数は比較的高い数値を示し, 草刈りが行われていない草地における直翅目の多様性が必ずしも高いわけではなかった。イタリアの牧草地における研究では, 年一回の草刈りが行われている草地における直翅目の多様性は草刈りが行われていない耕作放棄地のものより高くなり, 定期的な草刈りは直翅目の多様性を高める可能性がある(Marini et al., 2009)。草刈りが直翅目の多様性を高める要因として, 草刈りにより草地性の直翅目の生息に適さない日陰をもたらす樹木や低木の侵入が妨げられることが指摘されている(Marini et al., 2009)。

一方で, 草刈りによる草地管理が直翅目の生息の制限因子になる可能性もある。カンタン *Oecanthus longicauda* は帯広の森A, トイトツキ浜, 帯広畜産大学の3地点の調査地で確認されたが, これらの調査地はいずれも草刈りが行われていない草地でありこれら以外の調査地では本種を確認することができなかった。カンタンは主にヨモギ *Artemisia indica* などのキク科植物の茎に産卵するため(堀, 1927), 適度な草刈

りによりオオアワダチソウ *Solidago gigantea* のようなキク科植物が群生せずイネ科植物が群生する草地ではカンタンが生息する十分な環境が整っていない可能性がある。今回の調査で、ツユムシ *Phaneroptera falcata* のようなイネ科植物に産卵する直翅目は草刈りが行われており、低茎のイネ科植物が群生する調査地からも採集されていた。よって、カンタンのように特徴的な産卵環境が生息に必要となる直翅目は、草刈りの有無が生息の制限因子になると考えられる。放棄され草刈りが行われなくなった牧草地は植物に産卵する直翅目の生息に適した環境となることがわかっている (Marini et al., 2009)。このことから、草地内に草刈りを行わない区画を設置することは特殊な産卵環境を必要とする直翅目の保全に役立つ可能性がある。また、このような区画の設置は、イナゴモドキ *Mecostethus parapleurus* やナキイナゴ *Mongolotettix japonicus* といった比較的草丈の高い環境を好む草地性直翅目 (五十嵐ら, 1983; 山本・生方, 2009) の生息にも役立つと考えられる。

今回の調査地においてトイトッキ浜は唯一の自然草地であり、草刈りといった人為的な影響を受けていないが、Simpsonの多様度指数は0.5, Shannon-Weaver関数による多様度指数 (H) は1.34と他の調査地と比較しても高くなかった。北海道東部の海岸草地はハマナス *Rosa rugosa* やエゾノコウボウムギ *Carex macrocephala* のような海岸性の植物や、高山性の植物が優占する特殊な環境であるため (津田ら, 2002), 多くの直翅目の生息には適していない可能性もある。海岸草地が直翅目の生息にどのくらい貢献しているかを考察するためには今後さらなる調査が必要である。

人工草地の調査地において、育成牛の放牧地である八千代牧場の多様度指数が最も高い数値を示した。ドイツの研究では、激しい土地利用が直翅目の多様性を喪失させる一方で、過度な放牧が直翅目に与える負の影響は過度な草刈りや施肥に比べ少ないことがわかっている (Chisté et al., 2016)。また、家畜の放牧によってもたらされる草丈の不均一さや裸地の形成は直翅目の産卵や体温調節を助け、直翅目の多様性にとって良い影響を与えることが示唆されている (Gardiner, 2018)。日本の放牧地は糞虫やチョウ類の保全において生息地として重要な役割を担っているが (井村, 2007; 井上, 2007), 直翅目の保全においても生息地としての重要な役割を有している可能性がある。

要約

北海道十勝地方の人工草地、半自然草地を中心に直翅目の生息状況の調査を行った。その結果、9か所の調査地から6科23種の直翅目を記録した。採集された直翅目のうち、エゾコバネヒナバッタとヒナバッタの2種は多くの調査地で採集され、その採集個体数も多いことから十勝地方の草地性直翅目の優占種であると考えられる。

スweepingにより採集した直翅目の種数は糠平と十勝川河川敷が9種と最も多かった。調査地ごとに算出した多様度指数は糠平が最も大きかった。一方で、糠平からは林縁環境を好む直翅目が他の調査地より多く採集されたため、隣接する環境がデータに影響を与えたと考えられる。今回の調査において、カンタンは年一回以上の草刈りが行われている調査地では採集されず、草刈りにより生息が妨げられる可能性がある。草地内に草刈りを行わない区画を設けることは特殊な産卵環境を必要とする直翅目や草丈の高い環境を好む直翅目の生息を助けると考えられる。

謝辞

調査にご協力いただいた帯広百年記念館の伊藤彩子学芸員、帯広畜産大学の宮崎直美博士、帯広畜産大学昆虫学研究室の皆様へ深謝する。

引用文献

- 陳 俊, 堀 良通, 塩見正衛, 山村靖夫, 安田泰輔, 高橋秀昌, 伊木端穂, 2005. 半自然草地および森林化した長期放任草地の群集構造. 日本草地学会誌, 51:143-151.
- Chisté MN, Mody K, Gossner MM, Simons NK, Köhler G, Weisser WW, Blüthgen N (2016) Losers, winners, and opportunists: how grassland land-use intensity affects orthopteran communities. *Ecosphere*, 7(11):e01545.
- 秦 裕史, 中尾史郎, 養父志乃夫, 中島敦司, 山田宏之, 2003. 公園緑地におけるバッタ類の微視的生息場所選択. ランドスケープ研究, 66:607-612.
- 堀松次, 1927. カンタン *Oecanthus longicauda* の生態に就いて. 動物学雑誌, 39:129-147.
- 五十嵐良造, 川鍋祐夫, 酒井博, 1983. 直翅目昆虫

- と雑草を指標とした草地の生態区分. 草地試験場研究報告, 25:1-17.
- 井村 治, 2007. 放牧草地における糞虫の多様性と働き. 日本草地学会誌, 53:47-51.
- Ingrisch S, Köhler G, 1998. Die Heuschrecken Mitteleuropas. *Westarp Wissenschaften*, Magdeburg.
- 井上大成, 2007. 草地・森林の変遷とチョウ類の保全. 日本草地学会誌, 53:40-46.
- 板川 暢, 片桐由希子, 一ノ瀬友博, 大澤啓志, 石川幹子, 2010. 横浜市金沢区の港湾部埋立地における直翅目の分布状況とそれに影響を及ぼす環境要因. ランドスケープ研究, 73:431-436.
- Gardiner T, Hill J, Chesmore D, 2005. Review of the methods frequently used to estimate the abundance of Orthoptera in grassland ecosystems. *Journal of Insect Conservation*, 9: 151-173.
- Gardiner T, 2018. Grazing and Orthoptera: a review. *Journal of Orthoptera Research*, 27: 3-11.
- Marini L, Fontana P, Battisti A, Gaston KJ, 2009. Response of orthopteran diversity to abandonment of semi-natural meadows. *Agriculture, Ecosystems & Environment*, 132:232-236.
- 根津準一郎, 大澤啓志, 勝野武彦, 2011. 都市域内の河川緑地における直翅目の生息実態. 日本緑化工学会誌, 37:195-198
- 日本直翅類学会編, 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑. 北海道大学出版会、札幌.
- 西島浩, 1989. 北海道の直翅目一秋を告げる演奏家たちの現状一. 北海道の自然と生物, 1:34-43.
- 西島浩, 1990. 北海道の直翅目(続)(付ナナフシ目). 北海道の自然と生物, 2:14-20.
- 西島 浩, 小野決, 1982. 十勝川源流部原生自然環境保全地域における陸生昆虫類. 十勝川源流部原生自然環境保全地域調査報告書, 267-290. 日本自然保護協会, 東京.
- 農林水産省, 2009. 草地管理指標—草地の多面的機能編—. 日本草地畜産種子協会, 東京.
- 大垣俊一, 2008. 多様度と類似度、分類学的新指標. *Argonauta*, 15:10-22.
- 大窪久美子, 2002. 日本の半自然草地における生物多様性研究の現状. 日本草地学会誌, 48:268-276.
- 下田勝久, 2010. 生態系サービスと草地生態系. 日本草地学会誌, 56:162-165.
- Steck CE, Bürgi M, Bolliger J, Kienast F, Lehmann A, Gonseth Y, 2007. Conservation of grasshopper diversity in a changing environment. *Biological Conservation*, 138:360-370.
- 須田修, 2015. 上士幌町から記録された直翅目. ひがし大雪自然館研究報告, 2:15-21.
- 田中愛梨, 2022. 北海道上士幌町初記録のカワラバタ. ひがし大雪自然館研究報告, 9:39-40.
- Uchida K, Ushimaru, A, 2014. Biodiversity declines due to abandonment and intensification of agricultural lands: patterns and mechanisms. *Ecological Monographs*, 84:637-658.
- Ushimaru A, Uchida K, Suka T, 2018. Grassland biodiversity in Japan: threats, management and conservation. In: Squires VR, Dengler J, Feng H, Hua L (eds.) *Grasslands of the world: Diversity, management and conservation*, Boca Raton, FL: CRC Press, 197-218.
- 山本 冬人, 生方秀紀, 2009. 釧路湿原周辺部における直翅目昆虫10種の環境選好性. 釧路論集, 41:97-104.
- 養父 志乃夫, 山田宏之, 中島敦司, 中尾史郎, 松本勝正, 2000. 大規模市街地内から郊外地にかけてのバッタ類生息密度の変化について. ランドスケープ研究, 64:595-600.
- 吉尾 政信, 加藤倫之, 宮下 直, 2009. 水田環境におけるバッタ目昆虫の分布と個体数を決定する環境要因～佐渡島におけるトキの採餌環境の管理にむけて. 応用生態工学, 12:99-107.

調査記録

かつて浦幌で操業していたバット工場について

— 聞き取り調査と関連資料 —

持田 誠¹⁾

The "Bat Factory" once operated in Urahoro.

- Interviews and related materials on "Fukuzawa Manufacturing Co".-

株式会社福沢製作所は、1958（昭和33）年から1984（昭和59）年まで、浦幌町字寿町110番地で操業していた、野球で用いるバット製造を主としていた工場である。地域の人々からは「バット工場」「福沢バット工場」などと呼ばれていた。1977（昭和52）年には、50万本のバットを生産し、全国生産量の30%以上を占めるに至り、NHKのテレビ放送や雑誌で特集をされるなど（関矢1983：図11）、注目を集めた。

日本の木製バット生産については、脇田・松下（2015）が原料木の種類から流通に関して、一連の流れや時代変化をまとめている。また、1980年代における北海道の資源量と流通の現状については村木（1985）の報告がある。こうした資源量や流通過程に関する報告がみられる一方、生産現場の実態についての記述は多くない。

浦幌町立博物館には、福沢製作所の会社案内（図1）、バット製材見本（図2）と製品（図3、図4）が収蔵されている。これらの資料に関する情報の補完と、生産現場の実情について記録するため、当館では、福沢製作所について、経営者であった福沢祐介氏（現在は中川郡幕別町札内に居住）に聞き取りを実施した。また、聞き取りにあたり、福沢氏から同工場に関する写真を複製させていただいた。

本稿では、「バット工場」だった福沢製作所の歴史や概要について、聞き取りの内容を中心に、収蔵資料や複写させていただいた写真とともに報告し、浦幌町の林産業史上、重要な存在である同工場に関する記録資料とした。

調査にあたり、福沢祐介氏、まゆみ氏には当館まで足をお運びいただき、貴重な証言や資料の提供など、多大なご協力を賜った。

また、同氏への聞き取り調査に際しては、浦幌町立

博物館ボランティアである久我サトエ氏に仲介の労をとっていただいた。

旭川市の齋藤木材株式会社について、富良野市立博物館の泉団学芸員に資料調査の協力をいただいた。

関係された皆様方に深謝する。

なお、資料では福沢製作所の表記について「福澤」「福沢」の二種がみられるが、本稿では原則として「福沢」に統一した。

1. 文献による福沢製作所に関する記述

『浦幌町史』では「株式会社[㊦]福沢製作所」として、次のような説明がある。

昭和三十三年（1958）有限会社[㊦]福沢製作所として野球バット製造を開業。昭和三十八年（1963）チップ工場を増設、昭和四十二年（1967）三次製品製造のため、乾燥室二基及び仕上工場を新設、翌四十三年（1968）年株式会社として、資本金400万円に改組、N・H・K十勝ジャーナルにおいて、道東一円に紹介される。野球バットの生産高は、昭和四十三年（1968）度において、全国バット使用量の一二%を占める四五万本といわれ、総売上高8,000万円を算える。工場敷地は、1500坪、建物は350坪、従業員は、25名の工場である。代表取締役社長は、福沢源太郎、専務取締役は、福沢弥太郎の兄弟製作所として有名である。〔一部漢数字を算用数字に置き換え〕

また、『浦幌町百年史』では、「(株)福沢製作所(寿町)福澤源太郎」として、次のように記述している。

野球バット生産が主で、通称バット工場と呼ばれていた。当初はバットの素材作りであったが、「学研」の協力で乾燥工場を建て、ほぼ完成品を

1) 浦幌町立博物館 〒089-5614 北海道十勝郡浦幌町字桜町16-1

出荷するようになった。しかし、野球人口の減少など種々の条件が加わりバット部門を縮小し、広葉樹を主とする製函材ほか広葉樹材の挽き立てに変わったが、木材界の不況によって廃業した。

浦幌町商工会発行の『うらほろ商工ガイド』では、次のように概要が記されている。

株式会社福沢製作所

業務内容 野球バットの製造ならびに教材関係一切、大人用50%、少年用50% 少年用の完成品に関しては、全国第一位の生産量を獲得し、スポーツ店、量販店に好評をはくしている。

特 色 バットの生産に関しては、十勝、釧路一円の山から（道有林、民有林）伐採せし樹令100年以上のタモの原木を、第一工場にてバットの原形に荒引きし、更に天乾を行い選別したる良材のみを第二工場にて人工乾燥し、第二木取をなし超仕上機にかけ規格通りのゲージに製作する。当工場の特徴は、原木から製品まで一貫作業による工程で製品が出来るゆえ他のメーカーに見られない特徴といえよう。現在、科学的に更に強靱を増加すべく、鋭意研究を続けている。

2. 浦幌町立博物館所蔵資料

(1) 福沢製作所会社案内『Fukuzawa's BAT』（図1）

- ・資料番号2001-406（分類7715）
- ・体裁 B5判 モノクロ、一部カラー、6頁＋表紙・裏表紙
- ・寄贈 浦幌町役場
- ・備考 表紙の浦幌町市街地写真に、手書きで福沢製作所の位置が書き込まれている。取締役有福澤源太郎、専務取締役有福澤弥太郎、常務取締役に福澤祐介（本調査での聞き取り対象者）、深沢泰三の名がある。工場従業員、男子12名、女子18名の記述。浦幌町の本社・工場のほか、東京都渋谷区松濤2-7-12に東京営業所が所在する旨の記述がある。表紙に会社の英語表記があり、Fukuzawa sporting goods Mfg. Co. Ltd. と記述されている。

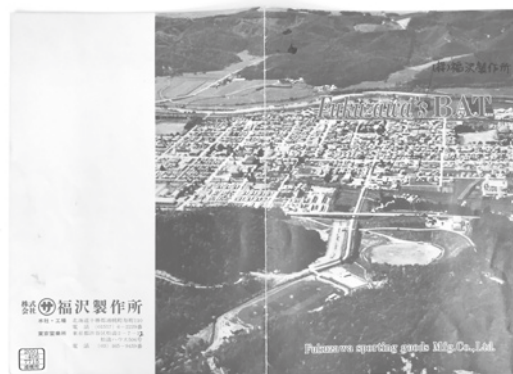


図1 福沢製作所会社案内『Fukuzawa's BAT』

(2) バット製材見本（図2）

- ・資料番号2020-288、289、290（分類6917）
- ・角材、角材から荒く削り出したもの、ほぼ完成形のもの3点。
- ・寄蔵者不明で、旧浦幌町郷土博物館で収蔵していたもの。資料番号は2020年に新たに付与している。



図2 バット製材見本

(3) 軟式ジュニア用木製バット（65）青色（図3）

- ・資料番号 2018-519（分類6917）
- ・寄蔵者 楯省造
- ・備考 福澤バット工場製作

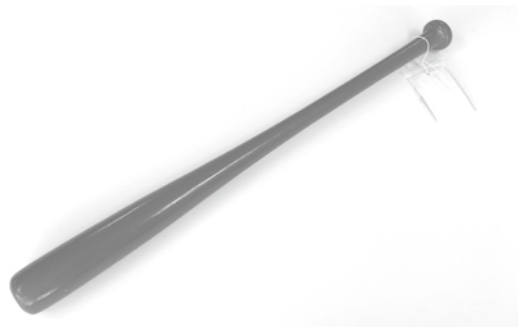


図3 軟式ジュニア用木製バット

(4) 福澤バット工場のバット (図4)

- ・資料番号 2020-267 (分類6917)
- ・寄蔵者 土本伸重



図4 福澤バット工場のバット

(5) 福澤バット工場写真 (図7～10ほか)

- ・資料番号 2020-294 (分類1640)
- ・点数 174点
- ・寄蔵者 福澤祐介
- ・備考 プリント判をスキャンして複製したもの。

3. 聞き取り

聞き取り年月日 2020年4月10日

聞き取り対象 福澤祐介 (福澤製作所元代表取締役社長)・まゆみ

調査者：持田誠 (浦幌町立博物館学芸員)

場 所：浦幌町立博物館学芸員室

凡 例：持田＝持田学芸員、福澤＝福澤祐介

備 考：活字化にあたって、一部の表現を変更している。個人の氏名について、漢字表記が不明の場合はカタカナ表記もしくは記号で示している。

(1) 福澤家の入植時期やご家族のこと

持田：福澤さんの家系は加賀から来られたようですが、いきなり浦幌に入られたんですか？

福澤：加賀から一回札幌に行ってすぐ旭川に。齋藤木材 (註1) って言ったかな。㊦の屋号 (写真5) はそこから受けて。それでいろんな山の造林造材とか…。



図5 福澤製作所の㊦の屋号

持田：なるほど、それから浦幌に入られたということですか。浦幌に来られたのは大正か昭和に入ってくるくらいですかね。

福澤：そうですね、きっと。

持田：ここの創業は〔昭和〕33年 (1958年) だから、だいぶあとですね。

福澤：ずっとあとですね。株式会社になってから。

持田：戦前に木材商として浦幌に入られて。

福澤：浦幌に入ったときに造材と独立した形になった。それで昔は飯場？みたいな、そこで北村商店もそうですけど、みんなそれぞれ店もやりながらしていた。そのうち米は戦争の米穀通帳で統制になって手放したこともあったと思うね。米とか酒とか、タバコはどうだったかわからないけど。

持田：福澤さんがお生まれになったのはその商店の方ですか？

福澤：はい。戦後は山から手を引いています。というのは、うちの父親の親が亡くなって、それでうちの父親も戦争に行きたくないから、上浦幌で国民学校の先生をやって。そんな話はよくね、本別が空襲にあった時に自分の自転車が上浦幌でやられたとか言っていて。

持田：すごい話ですね。

福澤：吉川さんという町長の時代 (註2) に教育長になって。よく学校の先生が来ていました。

持田：教育長されていた方は福澤なんとおっしゃるんですか？

福澤：福澤源太郎。

持田：お父さんはいつ生まれたんですか？

福澤：大正7年 (1918年)。

持田：お母さんは？

福澤：うちのお袋は〔大正〕11年 (1922年) かな。十勝の婦連協の会長とかね。有名人で。

持田：文化人家系だったんですね。

福澤：札幌に来て知っている人がいて、僕は全然そういうのにタッチしていないんだけどうちの女房が結構人付き合いのいい人で、その中に必ずうちのお袋を知っている人がいた。すごかった

からね。恥ずかしいくらい。

持田：ご家族はご両親と、ご兄弟は何人なんですか？

福沢：兄弟は4人です。

持田：4人兄弟のご長男になるんですか？

福沢：4人兄弟の2番目の長男。

(2) 事業内容

持田：バット工場は株式会社になったのは昭和33(1958)年ということですがけれども、それ以前からバットの製造自体は細々とやられていたんですか？

福沢：〔バット製材見本(図2)を示して〕もともととはここまで。

持田：製品として一貫になるのは株式会社になってからですか？

福沢：それはね、昭和52(1977)年。

持田：かなり後になってからですね。

福沢：学研(註3)ってありますよね、そちらの要請で作ったんですけども。

持田：学研の要請ですか。

福沢：子どもに知育、徳育と体育というのがテーマですね。その要請でやったんですけども。ソフトボールとか高校野球〔のバット〕が木製から金属に変わった時代でもあった。それでプロ野球用のバットと、大学野球とか社会人は木製でもよかったし、プロ野球でも圧縮バット…

持田：圧縮バット？

福沢：王さんが圧縮バットでホームランを相当打って。プロ野球の原材料っていうのはアオダモ(註4)の木がほとんどなんですけども。

持田：当時はアオダモはここで結構自生はあったんですか？今はあまり見ないですけども。

福沢：そうですね。十勝とか日高とか釧路の方とか(註5)。

持田：太平洋側にアオダモは多かったんですね。今ね、道有林が原木確保のため…(註6)

福沢：そうですね。プロ野球でも植林をやったり。

持田：アオダモはバット以外にも使う木なんですか？

福沢：いや、あのすぐく成長が遅く細い木で普通は。〔バット製材見本(図2)を示して〕これはタモの木ですけども、この場合丸太で4本くらい取るためには21cmから24cmは必要なんですけど。アオダモの場合には、成長がそんなにしない

ので18cmくらいからなので貴重なんですね。24cmくらいまで成長するのを待てば、相当一本当たりの取れ高は増えるんですけどもね。

持田：アオダモのいい点というのはアオダモのどういう点ですか？

福沢：やっぱり粘りとかそういうものだと思うんですよ。

持田：それは加工にあたっての利点ですか？

福沢：いや、道具として打つときに。

持田：打つときの粘りというのは当たったときの反動という意味ですか？

福沢：たぶんそうだと思います。

持田：ボールが来て反発するときのバウンド力といいますか、それがアオダモは優れているということなんですね。

福沢：本州ではトネリコという木(註7)。

持田：ヤチダモ(註8)は使わないんですか？

福沢：基本的にヤチダモ。

持田：高級材としてアオダモを使うということなんですね。ヤチダモはかなり太くなりますもんね。この辺もいっぱい生えているけど。

福沢：太くてもダメで、どっちかっていうと30cm。

持田：中がある程度詰まっているしっかりした木じゃないとダメだと。バットを作っていたのは昭和52(1977)年くらいから、製品まで作るようになっていつぐらいまで？

福沢：その前は僕は記憶ないんですけども、最終まで仕上げなかったけども〔バット製材見本(図2)を示して〕ここまで仕上げた時代はあったみたいですよ。ただ自分ではわからないんですけど。

持田：最後お辞めになったのは何年くらいですか？

福沢：えっと、もう、資金繰りに追われてっていうか。結局売れ筋が学研に頼まれて作ってたやつだから。そこがダメになったら。

持田：なるほど学研との関係で。

福沢：それでもいろいろ営業かけて、この刻印されるやつ(図6)ですね。シルクスクリーンって、いま、サクシンなんかで作ってる。



図6 シルクスクリーンによるバットのブランド表記

持田：美術作品なんかでつくっているやつ。

福沢：あれと同じ原理の。あれが25枚くらいあったから、要するに25くらいブランドというか相手があった。で自分で作る技術も身に着けたかったけどなかなか…。帯広の専門業者に頼んで。

持田：帯広の業者さんに版を作ってもらって。覚えていますか、この辺のマークとか。こないだも一人、町の方がこれ福沢さんのだと思っただけどって持ってきたら同じマークなんで、たぶんそうなんだろうなーと思うんですけどね。

(3) 工員や出荷について

持田：バット工場というのは十勝では、少なくとも浦幌では福沢さんのところだけですか？

福沢：いや、十勝では今やっているのは山内さんっていう（註9）、原料をたしかミズノに入れてたんじゃないかな。うちのバットは基本的には富山県に行って、あと、福井の武生の丹羽製作所に入れていた。今は買収されてゼットになっていますね（註10）。

持田：みんなだんだんそういう風になっていくんですね。

福沢：今はやってないとおもうんだけど、中野さんて帯広の、そこはバット以外のものを作り始めて。今の何十年も前の話になっているけど。

持田：浦幌では福沢さんのところだけ？

福沢：そうです。

持田：作ったものは浦幌から貨車積みして運ぶんですか？

福沢：ええ。原材料のね。

持田：ああ、製品になる前のものということですね。

福沢：製品はコンテナで送っていたんですけども。それで貨車よりもトラックでやるようになって。まだトラック野郎っていう時代でしたからね。たくさん積んでもらわないと運賃が高くなってしまいます。そしたらやっぱりね、こんな話したらおかしいけれども、ヤクザっぽい人の方がやってくれるの。

持田：そうなんですか。

福沢：そういう人にね、機嫌よくさせて。でもそういう、後に大手を通じてトラックを手配するようになったときに、やっぱりそういう人を使って

たよ。やっぱり仕事はやってくれるんだ。

持田：仕事をきちっとやってくれるし、柔軟に対応してもらえるとということですね。なるほどな。

福沢：そんな表向きの話じゃないけど。

持田：バットを作り始めた時はバット専業ですか？他のものも作ってたんですか？

福沢：うーんとね、スキーの板とか、原材料とか。それはほとんどすぐに無くなって。

持田：そうですか。これはあれですかね、結構人手がいる加工なんですかね？

福沢：手がいるね。

持田：当時工員さんは何人くらい働かれていたんですか？

福沢：あの時は、30人は超してたね。原材料だけだったら2、3人いれば。

持田：仕上げに持っていくのに人手がかかるんですね。みんなだいたい高校出たら入ってきてずっと働かれるんですか？

福沢：中学出たら。

持田：じゃあ本当に若いころから技術を磨いて、だんだん職人さんになっていくんですか？

福沢：うん。

持田：そういうのを教えていたのはお父さんになるんですか？

福沢：いや、父親は全くそういうことはしない。

持田：どこかから引き抜いて来たんですか？

福沢：あの一、農協にいたアカマさんのお父さんが。

持田：その方は元々何をされていた方だったんですか？

福沢：いや一、わかんないけど炭鉱にいたって話を聞いたことがある

持田：そうなんですか。そのあとはこちらの工場に入られてみなさんの指導をされたんですね。

福沢：あとそのあとはイイダタケシさんとか。

持田：なるほど。じゃあそういう腕の利く方に入ってもらって職人を育ててもらってということですね。こういうのは等級とか評価というのはあるんですかね

福沢：ありますね。出荷するときに全部ダメなもののはじかなければならない

持田：それは検査みたいなのがどこかから来るんですか？スポーツ協会みたいな。

福沢：来るというか、こっちに任せてもらう所もあれば同業者の組合みたいところでやる所も

あった。

持田：出荷時に仕上がりを検査してダメなものをどんだんはねていくと。

福沢：うちでだいぶ納めてたところはね、本州にいつてからはねられる。何本ダメだったとか。

持田：結構その段階ではじかれちゃったりもするわけですね。

福沢：木材関係の最終製品の規格は木材の相場が変わるわけではないから、製材されたものというのは原木が高くなったら厳しくなるんですよ。高くなったからもうちょっと緩やかになってもいいんじゃないかと。だから安くなったら緩くなる。

持田：これ(図2)ちなみに何と呼ぶんですか？

福沢：とくにはなかったと思う。

持田：バット製造で一番苦勞される点は？アオダモとかだと取れる量がというのはあるのではないですか？

福沢：やっぱり歩留まりが一番。実際にやる人も歩留まりを気にしながらどうやって丸太の姿を見て、丸太のどこを見て入れるかで決まってくる。それができる人がやっぱり優秀ということになる。0.5本ということはないわけですよ。1本でなかったら。その1本をとるとするのはすごいおっきなことなんですよ。

(4) 工場の概要

持田：正式名称は「福沢製作所」というんですね。みんな福沢バット工場と言っていましたけども。屋号がマルサなんですね。元々の〔旭川の〕齋藤さん(註1)の。

福沢：そうですね。

持田：福沢製作所のころの時代のことでこういう事故があったとか、こういう賞をもらったとか、何か記憶に残っていることはございますか？

福沢：まあ、うち、ほとんど大きな事故を起こさなかったことと、火事を起こさなかったことが自慢です。というのも、夜遅くまで火を使わないようにしてた。寿町の住宅街の中にあったから(図7)。ボイラーやったりとかがクレームになったりとかね。



図7 福沢製作所全景(資料番号2020-294の一部)

持田：臭いとかけむりとかですね。これは工場はずっと三交代制で？

福沢：いえ、それはないです。昼間だけで。休みの日もやったりとかはあったかもしれない。

持田：なるほど。こういったことに気を使って事故や火事を起こしていないというのはすごいですね。浦幌、火事多いですもんね。いろんな会社が火をだしたりとかあったから。

福沢：工場の火事とか結構あったからね。

持田：社員の方は寮に入られていたんですか？

福沢：寮も工場のとこにあったこともあったんですけどみんな出ていって。最後はタダで住んでもらって、夜回りだけしてもらって。工場の土場を。

持田：家賃はタダでその代わり工場の土場を見回りでくださいと。面白いですね。

福沢：そんな立派な事務所とか休憩室も無く、全体である中の一角に寮みたいにしてた。で会社の人みんな手伝ってたまたま頭下げて入ってもらって。

持田：なるほど。『浦幌商工ガイド』(浦幌町商工会1979)を見ると、福利厚生があって互助会があって年一回旅行があったり釣り大会があったり。釣りは珍しいですね。あと観楓会があったり。社員みんなで出かけたりというの。釣り大会というのはなんですか？海ですか？

福沢：釧路や白糠とか音別とかあっちの方に行ってやったことがありますね。

持田：観楓会は阿寒とか岩内ですか？

福沢：観楓会はここですね。旅行なんかは遠いとこだと函館とかに行きましたね。

持田：第一工場(図8)と第二工場(図9)というのがあったんですね。第一工場があらびきで第二工場では人工乾燥して仕上げたということですか？



図8 福沢製作所第一工場 (資料番号2020-294の一部)



図9 福沢製作所第二工場 (資料番号2020-294の一部)

福沢：そうですね。

持田：同じ敷地内にあったんですか？

福沢：そうですね。寿町の公園に児童公園というのがありますよね。そこの隣だったんです。

持田：これ昔は切った木材は馬で運んでいたんですか？

福沢：いやそんなことはない。

持田：トラックですか？

福沢：そうですね。ただ、農家の畑の周りにヤチダモがあって、何本か切ったから取りに来てくれたのがあって。

持田：農家さんからですか？

福沢：ええ。そういう場合には手積みですよ。学生時代とかやっていた。

持田：じゃあトビとかガンタとかそういう道具を使いながらやられていたんですか？

福沢：もともとそういう長さも。たしか2m~2m40cmくらいで。2人で。

持田：農家さんから買い取るということですか？

福沢：はい。それは浦幌に限らずで。

持田：自分の会社のバットが使われているところとか見に行ったりされたんですか？

福沢：中学校とか小学校とかに寄附して。

持田：ご自身も野球はされるんですか？

福沢：見るだけ。小学校ぐらいまでしか。小学校のときに三角野球とかそういう時代でしたね。最初は下手でもやらせてくれるけど、だんだんとクラス対抗とかになってくるとね。

(5) バット製造をやめてから

福沢：役場の人もかわいがってくれた。商工会の青年部もやっていたから。

持田：なるほど。商工会も当時はいっぱいいたでしょうからね。

福沢：40人以上いた

持田：林業関係だけでも、飯山鉛筆工場にいた方に話を聞いたんですけど、製材業だけでも結構な数があったんですもんね。

福沢：えんぴつ工場がありましたね。

持田：最後の方はお箸やアイスの棒などを作ったりしたと。でもえんぴつほど儲からなかったという話はされていましたね。

福沢：飯山さんは誰ですか？

持田：飯山さんの工場にお勤めだった楫省造さんという方から。これ(図3)も楫さんから寄贈いただいたんだな。

福沢：楫省造さんの弟さんが同級で。JRの札幌で出世頭で。現役のとき札幌で一回あったことがあるけれど。

持田：そうですね。当時の山関係とか林業関係の方とは付き合いはあるんですか？

福沢：もうなくなっちゃったね。

持田：当時の会社の記念誌みたいなのは作られていたりしますか？

福沢：ないですね。

持田：当時の写真以外にも会社の名前がはいっている手ぬぐいなどがあつたらお借りできればと。

福沢：いやー、引っ越し何回したか。倒産して再建して。設備が、もうその時は製材工場で、大手の木材商社の下でやってたんだけども。もう40過ぎたときに設備投資をしなきゃならんということで、一回倒産して金もない状態で。うちの設備は東栄木材さんの工場に全部うつして、従

業員だけおねがいして、僕は何回か従業員が東栄木材に定着するまで行って、定着したところに職探しに東京まで行って。それで知り合いの会社に入れてもらって。倒産したけど自分で経営をやっていた経験というのは生かされた。いろんところで働いたけれども、常に人を使う立場で働いた。表現できないけれども、いろんな経験を工場で出来たんだなど。

持田：きっとそうですね。倒産なさったのは何年くらいになるんですかね。

福沢：昭和53（1978）年生まれの子が小学校一年のときだから、〔昭和〕59（1984）年だね、たしか。いつヤクザもん来るかわからないからって、それで子どもを預かってくれるところがあって、3人の子どもを預かってもらって。

持田：それは大変なご苦労をされていますね。産業が斜陽化していく理由はいろいろあるかと思うんですけども、産業構造の変化ですか？

福沢：そうですね。

持田：外材とかそういうことですか？

福沢：バットで外材というのはその当時はほとんどなかった。ただ、バットから製材に切り替えた時に、北洋材（註11）って言って今のロシアとかそういったものを中心に北海道じゃなかなか上手く手はずできないというかね、やっぱり時期があるんですよ。そうすると冬に山から切ったやつは春まで動かない。商社系の人が動かさないから。それで春先になって木が出てこないような時期からちょっと高めに売ってくる。そういう時期に北洋材を苦小牧とか釧路とか、夏でもいきますけどね。ここのところは、三井物産というところがね。

持田：三井林業さんは今も厚内の方に林がありますもんね。

福沢：ここでは当時は木下林業さんが取り仕切っていました。農大出の若い頭のいい人がたくさん、こちらとはレベルが違うなど。それがこちらに来てね、実際に現場を手伝うんだから。たいしたものだな。大企業の系列の会社なのに。助けられましたよ。その頃にね、パークゴルフを今のニッタックスに声をかけられて。ボールを作らないかって。ただ、木を圧縮する技術がね。日本でもトップレベル級だから、そこがね、今回作れてよかったなって。作ったもので、福井

県にあるシャトルっていう会社の繊維機械に使うものがあるんですよ。そこがやっぱり曲げたりする技術を持っていて、木材の技術を持つ会社とつながりができたんだけど、力尽きて…

持田：いい話にはなりかけたんだけど、ということなんですね。本業のバットがうまくいなくなっていて、で別の業種にした時にもうまくいかなかったということなんですね。

福沢：これ以上は深入りしない方がいいということで。

持田：バットは学研さんの取引がなくなって、安定した取引先がなくなったということが大きいんですか？

福沢：そうですね。

持田：あとは金属〔バット〕にだんだんなくなっていったとか、需要そのものがなくなっていったと。

福沢：ソフトボールのバットがなくなったというのも。ソフトボールや少年野球のバットは細いから、欠点を取り除けるという利点もあるんですよ。例えば、節の跡とか、こういうのは短いバットだったらできるし、細いバットだったら無くせないかとかね。

持田：これは少年野球だったら使えるけど、プロ用のバットだとなかなかそうはいかないと。

福沢：だからそういう3段階に素材を活用できたのが、結局ランクが一番上のものしか使えなくなっていった。木材が原材料だけで木材の町というのに対して、鉛筆工場にしても東洋木材ならフローリング工場にしても、チャレンジして、飯山さんは鉛筆から箸までやって、東栄木材にしてもフローリングから木材の合板みたいなのがつくれば細かいものも作れますよね。結局生き残ったのは原材料に近い人たちだね。

持田：付加価値付けて製品の方にいくという所はやっぱり…

福沢：付加価値付けようと思っても結局うまくいかなかった。

持田：たとえばボールを作るとか普通の発想ではなかなか出ないところまで模索しなければならぬという…

福沢：芽室のゲートボールも全国的に広がって、結構素材の注文は内地の方から来ていましたよ。それでパークゴルフになったときに、さきほど

言った話がきて、その道の方と仕事終わったら毎日、今はやっていないけど幕別まで若い人とパークゴルフしに行きましたよ。だからそんな広まる前だったけれども、企業がそこまで挽回できなかったという…

持田：タイミング的に過渡期でなかなか本格的には…
福沢：少子高齢化のこともあって、報道される前に人口の動態を調べたらどうやっても年寄り向けの商品が必要だということで、パークゴルフとか絶対間違いはないという話だったんだけども。

持田：惜しかったですね。

福沢：だからそれをやるときにはもうちょっと市場調査が必要だったんだね。

持田：バットの？

福沢：ええ。たしかにそういう技術の延長上に置かれているものが結び付いたのだと思うんだけど。こっちで足を引っ張られた分、こっちの希望が少なくて済むような段階だったらまだ、そのまま出てきたものに追いつけたのかもしれないけどね。

持田：向こうの規格に引っ張られるのではなくて、こちらの規格である程度共有できる形であればというね。結果的にはバットで足を引っ張ってしまったと。

福沢：その頃の学研といたら超優良企業で。

持田：学習研究社ですよ。

福沢：ええ。

6. 福沢製作所の系譜

持田：バットは、福沢製作所としては親子二代でやっ

ているんですか？

福沢：おじさんに当たる福沢弥太郎という人がいたんですけど、54歳で亡くなって。朝から浴びるように酒を飲んでいて人で。肝硬変でなくなっただけ。

持田：その方は戦前にやられていたんですか？

福沢：僕が実務的にやっていた。町の人からは人気があって、人をまとめたりとか。

持田：この方も創業者になるんですか？

福沢：ええ、形の上では。

持田：実質は源太郎さんという方がやられていてそれを引き継いだということなんですね。三代に渡ってということですね。石川県からやってこられたのは弥太郎さんの時代ですか？

福沢：もっと上ですね。おばさんに当たる人が明治43年か44年(1910-11)か。その人のお腹に入っている時に来たって言っていましたから。うちの父親が旭川の小学校に入って、それからそのおばさんは南富良野の幾寅だとかに入って遊んだとか。そっちの方でも山があって木を切っていたんですね。そのときは未だ独立はしていないですね。独立したのはあくまでも浦幌(註12)。

持田：齋藤木材との関係であったところですね。浦幌に入られたのは戦前ですもんね？

福沢：ええ。

持田：昭和のはじめくらい？

福沢：だと思っんですけどね。さっき言ったおじさんは昭和2(1927)年生まれです。そのときはもうこっちに来てたんじゃないかと思います。

持田：どうもありがとうございました。



図10 福沢製作所工場風景(資料番号2020-294の一部)



図10 福沢製作所工場風景 (資料番号2020-294の一部)

図11 福沢製作所とバット製造について紹介する雑誌『週刊エコノミスト』(複写)

註

註1) 戦前、旭川市に本社を置き、北見、富良野、遠軽等に工場を置いていた齋藤木材株式会社のこと。『富良野市史』によれば、「空知川上流の木材資源の中で、造材業から身をおこした人に齋藤弥三郎がいる。相田仁太郎よりも少し古い時代の落合で基礎を築き、旭川で齋藤木材株式会社を起したが、木材業界での成功者であった」とある。『富良野地方史』によれば、齋藤弥三郎が「南富良野落合で造材業者として基礎を築き、旭川市で齋藤木材株式会社を起こして成功」したとされる。なお、『富良野市史』『富良野地方史』には、相田仁太郎は1906(明治39)年に南富良野町落合へ入って王子製紙の下請けをしたとされているので、齋藤弥太郎が落合で業を始めたのはそれ以前と考えられる。1924(大正13)年に東京支社を置くが、東京支社が1930(昭和5)年に独立。この独立した東京の齋藤木材株式会社が現存しているほか、各地に独立した木材会社が今も経営を続けている。

註2) 吉川利昌。1947(昭和22)年に旧浦幌村の第十二代村長となり、1954(昭和29)年の町制施行を経て初代浦幌町長となった。第2代町長に佐藤雪守が着任するまで町長を務めた。

註3) 学習研究社。「学研」の略称で知られる。1946年(昭和21年)4月に設立された学習研究社を母体とし、翌年1947(昭和22)年に東京都品川区平塚町八丁目1204番地に本社を置く株式会社となった。学習雑誌の発行のほか、幼児教育の基本とされる「知育＝頭の教育」、「徳育＝心の教育」、「体育＝体の教育」の考え方にもとづき、知育玩具の開発・販売などに取り組んだ。学研は、1994(平成6)年にホビーカルチャー事業部・レジャー玩具事業部を分離独立させ、株式会社学研玩具ホビーを設立。2006年には社名を「学研ステイフル」に変更した。2023年からは出版取次大手の「日本出版販売(日販)」の子会社となったが、現在も学研の系譜を引く知育玩具の開発・販売を手掛けている。

註4) アオダモ*Fraxinus lanuginose* Koidz. f. *serrata*

(Nakai) Murataのこと。モクセイ科の木本で、南千島以南の日本列島全域に分布する。植物学的には、ケアオダモ*Fraxinus lanuginose* Koidz. f. *lanuginose*を基準品種とする2品種に識別されるが、現場ではあまり区別されることはない。

註5) 高倉(2007)は、アオダモ原木については「十勝管内ではわずかに浦幌近辺にみられるだけ」と記述している。

註6) アオダモの供給は天然資源に依存してきたことに加え、近年のエゾシカによる食害の影響もあり、資源枯渇が危惧されていることから、森林総合研究所や北海道および野球関連団体で人工林の造成に向けた取り組みが進められている(高倉2007)。

註7) トネリコ*Fraxinus japonica* Blume ex K.Kochのこと。アオダモやヤチダモと同じくモクセイ科の木本で、日本では本州の中部以北の山地に分布し、北海道には自生しない。

註8) ヤチダモ*Fraxinus mandshurica* Rupr.のこと。モクセイ科の木本で、南千島から本州までの湿地に生育する。

註9) 中川郡本別町北6丁目操業する有限会社山内バット製材工場のこと。

註10) 福井県武生市(現、越前市)に本社を置いていたバットメーカーの丹羽製作所は、1997年8月にスポーツ用品卸のゼット株式会社と合併し、ゼットクリエイティブ株式会社武生工場となった。

註11) ロシアのシベリア地方で産出され輸出される木材のこと。1920年代から、当時のソビエト社会主義共和国連邦産の日本への木材輸出が始まった。第二次世界大戦時に中断したが、1954年(昭和29年)に再開し、長らく日本の木材需要を支えてきた。2010年以降は、日本への木材輸出は激減している。

註12) 『浦幌町議会史』によれば、福沢源太郎(初代)は浦幌町議会議員を1926(大正15)年6月から

1928（昭和3）年5月まで勤めている。

註13)『富良野町史』によれば、南富良野町の幾寅は註1に記述の相田仁太郎の木工場（相田木工所）と、その前身の幾寅木工所があったことが記されている。

引用文献

- 浦幌町議会史編集特別委員会，1991，浦幌町議会史。浦幌町議会。
- 浦幌町百年史編さん委員会，1999。浦幌町百年史。浦幌町役場。
- 浦幌町史編さん委員会，1971。浦幌町史。浦幌町役場。
- 浦幌村社会教育協会，1949。浦幌村五十年沿革史。浦幌村役場。
- 浦幌町商工会，1979。うらほろ商工ガイド。浦幌町商工会。
- 富良野市役所，1969。富良野市史第2巻。富良野市役所。
- 岸本翠月，1969。富良野地方史。富良野地方総合開発連絡協議会事務局。
- 関矢礼二，1983。（統計風土記25）いまや希少材のアオダモ 野球バット。週刊エコノミスト，1983年10月4日号：72-79。（図11）
- 高倉康造，2007。バット材に適するアオダモ遺伝資源の保存。林木遺伝資源情報，71: 1-2。
- 脇田健史・松下幸司，2015。野球用木製バットの材種と流通。森林応用研究，24（2）：19-27。

〔採集記録・観察記録〕

浦幌のウチダザリガニ駆除（2021～23年）

円子紳一¹⁾Shinichi Maruko, 2024. The extermination of *Pacifastacus luniusculus trowbridgii* in Urahoro, eastern Hokkaido, 2021～2023

Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 24: 37.

「浦幌の自然を楽しむ会」によるウチダザリガニ駆除は9年を経過した。この間、2015年から23年までに76回の捕獲作業で5,229匹を駆除した。浦幌川本流で160匹、オベトン川で2,191匹、旧オベトン川で2,874匹、常室川で4匹だった。

2021年は、浦幌川でカニカゴにより2回、オベトン川ではカニカゴ1回ととも網2回、旧オベトン川でも網1回、常室川でも網1回の駆除作業を行った。7月18日の常室川での捕獲は初めてである。8月1日のウチダザリガニ バスターズは、園児2人と小学生11人、大人6人の計19人の参加を得て行われた。酪農学園大学野生動物保全技術実習は、新型コロナウイルス感染症防止対策のため前年に続いて中止された。

2022年は、オベトン川ではカニカゴ2回ととも網1回、旧オベトン川でも網1回の駆除作業を行った。バスターズは小学生14人の申し込みがあったが、町内の新型コロナウイルス感染拡大により中止とした。酪農学園大学野生動物保全技術実習（学生ら16人）は3年ぶりに実施できた。

2023年は、オベトン川でも網2回の駆除作業を行った。7月30日のバスターズ（参加者 小学生9人、大人14人）と8月23日の酪農学園大学野生動物保全

技術実習（学生ら14人）である。

新型コロナウイルス感染症や昨年夏の猛暑など、活動の機会が減っているが今後も駆除を続けて行きたい。駆除活動の中心となっている「浦幌の自然を楽しむ会」のみなさん、町立博物館の持田誠学芸員、「ウチダザリガニ バスターズ」「酪農学園大学野生動物保全技術実習」に参加いただいたみなさんに心から感謝申し上げる。

参考文献

- 円子紳一. 2016. 浦幌で初めてのウチダザリガニ駆除. 浦幌町立博物館紀要. 16: 9-13.
- 円子紳一. 2017. 浦幌のウチダザリガニ駆除（2016年）. 浦幌町立博物館紀要. 17: 9-11.
- 円子紳一. 2018. 浦幌のウチダザリガニ駆除（2017年）. 浦幌町立博物館紀要. 18: 15-18.
- 円子紳一. 2020. 浦幌のウチダザリガニ駆除（2018・2019年）. 浦幌町立博物館紀要. 20: 31-32.
- 円子紳一. 2021. 浦幌のウチダザリガニ駆除（2020年）. 浦幌町立博物館紀要. 21: 35.

表 浦幌町での捕獲数の推移

捕獲年	捕獲数				
	合計	浦幌川	オベトン川	旧オベトン川	常室川
2015年	111	93	18		
2016年	200	15	185		
2017年	292	4	288		
2018年	1,186	0	412	774	
2019年	541	29	243	269	
2020年	1,297	9	238	1,050	
2021年	467	10	218	235	4
2022年	735	0	189	546	0
2023年	400	0	400	0	0
計	5,229	160	2,191	2,874	4

1) 浦幌の自然を楽しむ会 〒089-5634 北海道十勝郡浦幌町字帯富



ウチダザリガニマスターズ2023の参加者集合写真（2023年7月30日）



酪農学園大学野生動物保全学実習におけるオベトン川でのウチダザリガニ調査（2023年8月23日）

資料紹介

大正十五年

昭和元年

教育雑件〔その八〕

浦幌村役場

三浦直春・大和田努 解説

本報は、浦幌町立博物館所蔵の「大正十五年 昭和元年 教育雑件」(浦幌村役場) 簿冊に綴られた各文書を翻刻したものである(図1)。各文書の内容については、冒頭に目録が綴られており、紀要第16号(2016年発行)に掲載してある。本号には目録の文書番号三七から四六までを掲載した。

各文書については、紀要に文書毎に分割して掲載している。なお、掲載の順序は、原則として「教育雑件」に綴られている順序とする。

翻刻は、浦幌町立博物館ボランティアの三浦直春が担当してきたが、三浦が2018年に逝去したため、帯広百年記念館学芸員の大和田努が引き継いだ。



図1 大正十五年 昭和元年 教育雑件(浦幌村役場)

※原資料は浦幌町立博物館で収蔵していますが、資料の劣化防止などのため、展示公開はしていません。調査・研究上の理由で必要な場合には、所定の手続きにより閲覧する事が可能です。原資料の閲覧が必要な場合は、博物館までお問合せ下さい。

〔浦幌町立博物館学芸員〕

本年度翻刻を実施した史料に付される番号および件名は左記の通りである。
文書番号の区切りになる箇所は棒線、同じ文書番号内で到来した文書を綴るなど作成者・発
信者の区別ができる箇所は波線で示した。

三七	徴兵署視察二千スル件
三八	瘡瘡豫防二千スル注意ノ件
三九	學事工程報告
四〇	歴略略説配布ノ件
四一	旧土人就学兒童調二千スル件
四二	実業補習学校専任教員補助ノ件
四三	教員辞令二千スル件
四四	実業補習学校調査ノ件
四五	教員辞令二千スル件
四六	職員居所通知ノ件

枠は朱欄外

第 三 七 號

案後閱

教第三二六號

大正十五年四月七日

完 結 票

各町村長 殿

受付印有

河西支廳長 那須 正夫

印

「村長」

徴兵署視察二関スル件

本年度徴兵検査ハ来ル四月二十四日ヨリ開始セラレ候処之カ状
況視察セシムルハ直接兒童教育並ニ青年指導上裨益鮮少ナラサ
ル義ト被存候ニ付経費ノ許ス範圍内ニ於テ貴部内小學校長ヲシ
テ自己町村壯丁検査日ニ出張視察セシメ度候条可然御取計相成
候様致度此段及通牒候也

追テ視察ノ為出張スル者ニ対シテハ出張命令省略本通牒ヲ以
テ命令ト看做シ処理相成度尙出張セシムヘキ職氏名ハ本月
二十日迄ニ報告相成度申添候

完結票

村長	印
首席	印
主任	印
施行	済
完結	結

枠は朱欄外

第 三 八 號

大正十五年 四月 七日發議 大正 〃年 〃月 〃日議決
〔大正十五年四月 八日〕淨書校合

村長 村首席 合議 主任 發議者

番號 七六四 號 發信者 浦幌村長

宛名 各小學校長 宛
件名 痘瘡豫防ニ関スル注意ノ件

完(欄外) 今般東京神奈川外十三府縣ニ於テ痘瘡患者發生シ漸次蔓延ノ兆有之
結 候ニ付テハ此際學候傳染病豫防規程ニ基キ該病ノ豫防上遺憾ナキヲ
票 期セラレ度其ノ筋ヨリ注意ノ次第モ有之右及移牒候也

追而萬一職員兒童中ニ患者發生ノ場合ハ直ニ御報告相成度尚本年
定期種痘ハ来ル五月初旬ヨリ施行ノ見込ニ付申添

完結票

村長	印
首席	印
主任	印
施行	印
完結	印

教第二〇七號 (印)

大正十五年三月十三日

河西支廳長 (印)

那須 正夫 (印)

「受付印有」
(兼スタンプ)

各町村長 殿

痘瘡豫防ニ関スル注意ノ件

今般東京神奈川外十三府縣ニ痘瘡患者發生シ漸次蔓延ノ兆有之ニ
就テハ此際貴部内學校教員及學校医ヲシテ學校傳染病予防規程ニ
基キ該病豫防上遺憾ナキヲ期セシメラレ度

追テ万一職員生徒兒童中ニ患者發生ノ場合ハ遲滞ナク後報告相
成度

梓は朱欄外

第 三九 號
朱 黒 朱

學事功程報告

一、管内學事ノ狀況

1 方針 忠 考

教育勅語ニ基キ之レカ實踐活用ニ努ム

2 教授 修身科

教育勅語及戊申詔書並ニ國民精神作興ニ關スル詔書ノ御
旨意ニ基キ教科書ニアル忠孝實踐者及現社會ノ事實ヲ挙ケ
教授ノ材料トナス

3 國語科

日常生活ニ必要ナル文字文章ヲ會得セシムルヲ第一着トシ
自己ノ思想ヲ正確ニ表示シ智能ヲ養ヒ知徳ヲ啓発セシムル
ニアレバ讀方書方綴方話シ方ニ注意シ以テ児童ニ練習セシ
ム

4 書方 習字ノ手本ニ因リ周密ナル觀察ヲナサシメ筆法ヲ會
得セシムル四年生以上ノ児童ニハ古葉書ヲ利用シ細字ノ練習
ヲ兼テ普通日用文ヲ作製セシメ添削標語ヲ附シ實際活用ノ
練習ヲナス

5 綴方 讀方其他ノ教科目ヨリ或ハ児童ノ経路ヨリノ事項ヲ記
述セシメ又ハ教科書中ノ生活ニ必要ナル事項ヲ書取ラシム

6 算術科 暗算ニ重キヲ置キ数学ノ練習ヲ怠ラズシテ運算敏
速精確ヲ計リ兼テ思考ヲ精確ナラシムル事ニ努ム問題ハ土
地ノ情况ヲ斟酌シテ適切ナルモノヲ選ブコトニ注意ヲ拂フ
四年生以上ニ毎週一時間ノ珠算ヲ課ス

一、一週ニ二回ノ復習ヲ課シ達讀ナラシム其ノ方法トシテハ始業
前中食後或ハ居残りノ時間ヲ利用ス

二、教育勅語及詔書ノ始業前三學年以上ノ児童ニ奉讀セシメ御旨
意ノ徹底ヲ期ス

三、教授案ハ週案ヲ以テ日々ノ教案トナシ實施シツ、アリ

四、劣等児童ニ対シテハ時間ノ許ス限り個別教授ヲナシツ、アリ

五、成績考査ハ日々ノ實習結果尋常ヲ區別シ嚴重ニ甲乙丙丁ノ調
査ヲナス

六、家庭ニ於テノ復習ハ父兄訪問毎ニ注意スレドモ成績甚ダ不良
ナク然レドモ間斷ナク奨励シツ、アリ

訓練

イ 児童ニ対シ平素敬神ノ念ヲ興サシメ毎月一回児童引率シテ
神社佛閣ニ参拝シテ礼儀ヲ守ラシム

ロ 当場ノ児童ハ通學道路ハ山谷ナルカ為メ父兄ト連絡ヲトリ
児童ノ危険ヲ看護シツ、アリ

ハ 部落民ノ吉凶慰問ハ必ス洩ス事ナク實行シ父兄ト親密ヲ謀
リツ、アリ

ニ 級長ニ週番ヲ命シ児童ノ品行ヲ向上セシム
ホ 家庭ト連絡ヲ取ルカ為メ屢ニ家庭訪問シテ現社會ノ不良少
年ハ無教育ノ為メ社會ニ害ヲ與ヘツ、アル事實ヲ挙ケ教育
ハ人生ニ必要ナル事例ヲ論シ父兄集會毎ニ児童教育上ノ注
意ヲ與ヘツ、アリ

養護ノ救急治療トシテ應急手当ニ要スル藥品ヲ備ヘ置ク

3 体操ハ身心ヲ鍛鍊シ体育上最モ必要ナルモノニシテ小ハ一
身ヲ壯健ニシ大ハ國家ノ守護者トシテ元氣旺盛ナラシムル
為メ練習ニ重キヲ置キ殊ニ規律的訓練ニ注意ヲ拂フ

4 校舍内外ハ可成清潔ヲ保タシムルモ遺憾ナルハ校ノ敷地ハ
谷地多クシテ校舍ノ四圍ニ大ナル排水工事ヲ施サ、レハ完
全ナル校舍敷地トナス事不可能ナリ

5 児童奨励ノ為メ毎週書方成績物ニ優等ナルモノヲ校内ニ掲
示シ益々奨励ノ實ヲ挙ゲ其ノ賞品トシテ學用品ヲ與ヘツ、
アリ

6 体育上ノ養護トシテ一般ノ衛生ハ勿論早起食料ノ程度通風
光線等之利害ヲ挙ゲ例話ヲ為シツ、アリ

管理 當場ノ位置ハ通路ヨリ百五十四間離レタル山麓ニアルカ為
メ自カラ火ヲ失ハサレハ他ヨリ延焼ノ憂ナシ然レトモ若シ
一朝猛烈ナル山火起レハ三方皆ナ山又山ナル為メ甚タ危嶮
ノ位置ニアリ平素部落民ニ充分ノ注意ヲナシ大火災ノ予防
ニ努ム

學校衛生

學校ノ清潔ヲ保ツ為メ春秋二回ノ掃除ノ外日々當番兒童ニ掃除
ヲ命シ且毎土曜日ニ大掃除ヲナス

學校園

學校園ト称スル程度ニ至ラサレトモ数十坪ノ土地ニ菊及西洋草
花ヲ植ヘ校庭ノ風景ヲ増シ兒童ヲシテ放課時間ニ手入ヲナサシ
ム

記念碑

本年六月十六日ハ開校五周年ニ相当スルカ為メ記念碑ヲ建セツ
但シ管内住民ノ寄付行為ニ依ラス小職ノ獨力ニテ建設セリ

一、學事關係職員學事視察

留真尋常小學校長花見八百三氏三回視察ノ為メ來場セリ
受持教員は月ニ一回又ハ二回必ス父兄ヲ訪問シ家庭ニ於テ兒
童復習ノ件其他重要ナル希望ヲ述ヘ一方世話係ヲ出張セシメ
兒童ノ出席督勵ヲナシ父兄ニ対シテ農業多忙ノ時モ兒童ヲシ
テ欠席セシメサル事ヲ注意ス

學事奨勵

父兄ニ対シ屢々集會ヲ求メ義務教育ノ趣意ヲ忘ルヘカラサル
モノナル事ヲ講話シ學校ト家庭トノ接近ヲ謀リツ、アリ
以上

右報告ニ及候也

大正十五年 月 日

十勝郡浦幌村

留真尋常小學校所屬

瀬多來特別教授場代用教員

古林 繁越

印

完結票

村長	印
首席	印
主任	印
施行	濟
完結	結

枠は朱欄外

第 四 〇 號

大正15年 4月14日發議 大正 〃年 〃月 〃日議決 (案スタンプ) 「大正拾五年四月拾四日」浄書校合印

教第二七六號

印

受付印有

印

村長 印 首席 印 合議 主任 發議者 印

大正十五年四月十三日

完(欄外) 番號 一、一九九 號 發信者 浦幌村長

〔浦幌村長 殿〕 (加筆)

河西支廳長 那須 正夫

票 宛 名 浦幌 上浦幌尋常高等小學校長 宛

印刷物送付ニ関スル件

件 名 歴晷略説配付ノ件

工學博士石橋絢彦氏著作ニ係ル留歴晷略説北海道廳ヨリ寄贈相受ケ候ニ付一部及送付候条御査収相成度

今般北海道廳土木部ヨリ別冊送付ヲ受ケ候ニ付貴部内尋常高等小學校ニ対シ左記部数送付候條各校一冊宛配本相成地理参考資料トシテ有効ニ使用セシメラレ度

追而本書ハ地理参考資料トシテ有効ニ使用セラル、様致度其ノ筋ヨリ来意ノ次第モ有之候ニ付申添候

追テ当廳ニ餘部無之ニ付不足モ場合ハ貴職ニ於テ適宜配付相成度申添候

完結票

左

歴 晷〔マヽ〕 略 説 〔2〕部 (加筆)

村長 印 首席 印 主任 印 施行 済 完 結

第 四 一 號 (朱 黒 朱)

枠は朱欄外

大正15年 4月15日發議 大正 〃年 〃月 〃日議決 「大正拾五年四月拾五日」浄書校合印

村長 印 首席 印 合議 主任 發議者 印

印

完^(欄外) 番號 一、二一九 號 發信者 浦幌村長
 結 宛名 河西支廳長殿
 票

件名 旧土人就学兒童調ニ關スル件

大正元年八月二十二日付教第九九五號ヲ以テ御通牒相成候首標ノ件該
 當事項無之候

完結票

完	施	主	首	村
結	行	任	席	長
	濟	①	①	①

枠は朱欄外

第^朱 四^黒 一^朱 號

請求書

決^(欄外) 一金參百參拾六円也
 裁 但シ大正十五年三月三十一日内教第一二二八號ヲ以テ御指令ニ
 印

完^(欄外) 係ル大正十四年度本村立農業補習學校専任教員俸給ニ対スル補
 結 助金
 票 右及請求候也

大正十五年四月十五日

北海道廳長官 中川 健藏 殿

〔加筆〕
 「大正十五年六月十一日収入済」

決裁印

任	主	議	合	席	首	長	村
					①	①	①

完結票

完	施	主	首	村
結	行	任	席	長
	濟	①	①	①

指令書謄本

内教第一、一二八號指令

十勝郡浦幌村
 浦幌農業補習學校設立者

浦 幌 村

大正十四年度其ノ村立補習學校專任教員俸給ニ對シ金參百參拾六
円補助ス但シ左ノ通心得ヘシ

大正十五年三月三十一日

北海道廳長官 中川 健藏

手書き
印

記

一、大正十四年度ニ於ケル事業ノ状況ヲ大正十五年六月三十日限
リ報告スヘシ

前項ノ事業報告ニハ教授ノ時間、授業日数、生徒数、出席歩
合及職員ノ資格職氏名、就職年月日、俸給額、専任兼任ノ別
等ヲ明カナラシムヘシ

二、大正十四年度収支決算決定ノ上ハ直ニ之ヲ報告スヘシ収支決
算書ハ豫算額ト対照記載シ且其ノ増減ニ就キ説明ヲ附スヘシ

右原本ニ依リ謄写ス

大正十五年四月十五日

十勝郡浦幌村長 石原 重方

教第三三〇號 (印)

大正十五年四月十日

(印)

〔受付印有〕 (印)

〔浦幌村長 殿〕 (加筆)

河西支廳長 那須 正夫

實業補習學校經費補助ノ件通牒

貴部内左記実業補習學校專任教員俸給ニ對シ別紙ノ通補助指令
相成候條指令書謄本ヲ添ヘ長官宛請求書正副式通本月十七日迄
当廳へ御提出相成度及通牒候也

内教一、一二八號 指令

(印)

〔十勝郡浦幌村〕 (加筆)

〔浦幌農業補習〕學校設立者 (加筆)

〔浦幌村〕 (加筆)

大正十四年度其ノ「村立」補習學校專任教員俸給ニ對シ金「參百參
拾六」圓補助ス但シ左ノ通心得ヘシ

大正十五年三月三十一日

北海道廳長官 中川 健藏

北海道
廳長官
之印

記

一、大正十四年度ニ於ケル事業ノ状況ヲ大正十五年六月三十日限り報告スヘシ
 前項ノ事業報告ハ教授ノ時間、授業日数、生徒数、出席歩合及教員ノ資格、職氏名、就職年月日、俸給額、専任兼任ノ別等ヲ明カナラシムヘシ
 二、大正十四年度収支決算決定ノ上ハ直ニ之ヲ報告スヘシ収支決算書ハ豫算額ト対照記載シ其ノ増減ニ就キ説明ヲ付スヘシ

大正十五年 三月二四日發議 大正 〃年 〃月 〃日議決 (紫スタンプ) 〔大正拾五年參月廿四日〕 淨書校合



村長 ① 首席 ① 合議 主任 發議者 ①

番號 九〇〇 號 發信者 浦幌村長

宛名 河西支廳長 宛

件名 大正十四年度実業補習学校補助申請ノ件

客年五月四日浦第一一五九號ヲ以テ大正十四年度実業補習学校補助申請書提出致置候處右ハ補助セラレザルモノニ候哉至急何分ノ御回報相成度一応及御照会候也

(紫スタンプ) 〔大正拾五年參月廿四日〕

大正14年 5月 4日發議 大正 〃年 〃月 〃日議決 大正 年 月 日淨書 校合

村長 ① 首席 ① 合議 主任 發議者 ①

番號 一一五九 號 發信者 村長

宛名 河西支廳長

件名 大正十四年度実業補習学校補助申請二千スル件
 実業補習学校補助規〔定〕^(削除)〔程〕^(加筆)ニ依リ本件申請候条可然御取計相成度候

教育補助費許可申請

一金三百五十五円

右実業補習学校補助規〔定〕^(削除)〔程〕^(加筆)ニ依リ大正十四年度ニ於テ地方費補助御許可相成度別紙収支計算書添付此段及申請候也

大正十四年五月四日

浦幌村長

北海道廳長官 殿

浦幌村大正十四年度一般会計歳入歳出豫算表抄本

歳入		歳出	
科 目	豫 算 額	科 目	豫 算 額
第五款地方費補助	六八三	第四款教育ヒ	三六、九一四
第二項全 上	五九三	第六項実業補習学校	一、八〇〇
	半額金一九八円	一日俸給	八四〇
	特別教育規定ニ依ル尋常小学校	二目手当	二二五
	教員俸給補助金四〇円	三目慰勞金	七〇
	実業補習学校俸給及手当一、		
	〇六五円ニ対スル三分ノ一補助		
	金金三五五円		
四目備品費	一四〇	附 記	
	五円		
	一校ニ付 教科書及参考書代金		
	洋燈一組一円五十銭 ツ、二組		
	代金三円		
	其他備品ヒ二円		
	計金十円 十四校分此金百四十		
	円		
三目消耗品費	五二五		
	一校ニ付		
	薪小切共一敷六円ツ、四敷分此		
	金二十四円		
	石油一罐四円五十銭		
	其他雜品代二円 計三十五円		
	十五校分此金五百二十五円		

〔欄外朱筆〕
「特急」

教第九一四號 ⑩

大正十四年四月二十一日

河西 支廳長 那須 正夫

各町 村 長 殿

實業學校及實業補習學校補助ニ関スル件

〔紫スタンプ〕
「受付印有」

⑩

明治四十年五月廳令第六十三號實業學校補助ニ関スル規程及大正十一年十二月廳令第一九七號實業補習校補助規程ニ依リ大正十四年度ニ於テ補助ヲ受ケムトスル向ニシテ申請未済ノモノ有之候ハ、此際至急申請相成度

追而申請期限經過後ニ付或ハ補助セラレザルコトアルヤモ圖リ難キニ付豫メ後了知相成度申添ヘ候

枠は未欄外

第^朱四^黒三^朱號

浦発第八号

㊟

大正十五年四月二十日

㊟

浦幌尋常高等小學校長 成田 惣八浪

北海道十勝郡公立浦幌尋常高等小學校長之印

浦幌村長 石原 重方 殿

教員辞令二千スル件

票 結 完^(欄外)

今回新任ノ當校訓導府録幸平ノ任命辞令別紙寫ノ通りニ候間此段報告候也

完結票

村長 ㊟
首席 ㊟
主任 ㊟
施行 濟
完 結

府録 幸平

北海道十勝郡浦幌尋常高等

小學校訓導ニ任ス

但本科正教員勤務

七級下俸給與

大正十五年三月二十三日

注 日付文字の上に正方形（印影を示すためのもの）有

枠は未欄外

第 四 四 號

大正十五年 2月20日發議 大正 〃年 〃月 〃日議決 (兼スタンプ)
「大正拾五年參月 廿日」淨書印校合印

村長 ① 首席 合議 主任 發議者 ①
番號 一、二四五 號 發信者 浦幌村長

宛 名 河西支廳長 宛
件 名 度実業補習學校ニ関スル調査ノ件

大正十年三月教第一七二八號御通牒ニ依ル標記ノ件別紙ノ通り及
報告候也

完結票

村長 ① 首席 ① 主任 ① 施行 ① 濟 ① 完 結

第一號大正十五年度公立實業補習學校經費豫算調 (四月二十日調)

計	商 船	商 業	水 産	農業 (女子ヲ容スルモノ)	農業 (男子ヲ收容スルモノ)	工業 (女子ヲ收容スルモノ)	工業 (男子ヲ收容スルモノ)	經 常 費					
								專任教員給	兼任教員給	計	其 他	合 計	臨時費
九〇〇	、	、	、	、	九〇〇	、	、						
二二〇	、	、	、	、	二二〇	、	、						
一、一一〇	、	、	、	、	一、一一〇	、	、						
六七〇	、	、	、	、	六七〇	、	、						
一、七八〇	、	、	、	、	一、七八〇	、	、						
、	、	、	、	、	、	、	、						
一、七八〇	、	、	、	、	一、七八〇	、	、						

計 合				計 立 私			計 立 村 町			計 立 市			計 立 縣 府 道			
計	男女ヲ収容スルモノ	女子ヲ収容スルモノ	男子ヲ収容スルモノ	計	男女ヲ収容スルモノ	女子ヲ収容スルモノ	男子ヲ収容スルモノ	計	男女ヲ収容スルモノ	女子ヲ収容スルモノ	男子ヲ収容スルモノ	計	男女ヲ収容スルモノ	女子ヲ収容スルモノ	男子ヲ収容スルモノ	
\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	工業
一四	\	\	一四	\	\	\	\	一四	\	\	\	\	\	\	\	農業
\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	商業
\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	工業 商業
\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	商業 農業
\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	商船
\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	水産
\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	其他
\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	\	
\	\	\	一四	\	\	\	\	一四	\	\	\	\	\	\	\	計

第二號 實業補習學校教員數調（四月二十日現在）

計	商 業	商 船	水 産	農業 (女子ヲ収容ス ルモノ)	農業 (男子ヲ収容 スルモノ)	工業 (女子ヲ収容 スルモノ)	工業 (男子ヲ収容 スルモノ)			専 任 教 員 數
								校長訓導	以上ノ學 以下ノ學	
\	\	\	\	\	\	\	\	校長訓導	其他	實業學科担任
一	\	\	\	\	一	\	\	校長訓導	其他	
\	\	\	\	\	\	\	\	計		
一	\	\	\	\	一	\	\	校長訓導	其他	普通學科担任
\	\	\	\	\	\	\	\	校長訓導	其他	
\	\	\	\	\	\	\	\	計		
\	\	\	\	\	一四	\	\	數 員 教 任 兼		
\	\	\	\	\	一五	\	\	計 合		

第三號 公立實業補習學校教員數調（四月二十日現在）

教第三六二號 ⑩

大正十五年四月十六日

⑩

〔受付印有〕

⑩

〔浦幌^(加筆)村長 殿〕

河西支廳長 那須 正夫

實業補習學校ニ関スル調査ノ件

大正十年三月教第一七二八號通牒ニヨリ本月二十二日迄ニ提出相成ルヘキ標記ノ件期日ヲ違ヘサル様御提出相成及通牒候也

追テ調査表欄中当該欄無之場合ハ一ノ印ヲ附シ各欄整備御提出相成度尚旧規程ニ依ル実業補習學校ニシテ未タ廢止ナラサル限リハ調査報告ヲ要スヘキニ付為念申添候

枠は朱欄外

第^朱四^黒五^朱號

完^(欄外) 結 票

浦発第十號

大正十五年四月二十四日

⑩

〔受付印有〕

⑩

浦幌尋常高等小學校長 成田 惣八郎

浦幌村長 石原 重方 殿

教員辞令ニ関スル件

北海道十勝郡公立浦幌尋常高等小學校長之印

今回新任ノ當校訓導福井義松ノ任命辞令別紙寫ノ通りニ候間此段及報告候也

完結票

完	施	主	首	村
結	行	任	席	長
	濟	⑩	⑩	⑩

北海道十勝郡浦幌農業補習學校助教諭

福井 義松

兼北海道十勝郡浦幌尋常高等小學校訓導二任ス

但專科正教員勤務

大正十五年四月十五日

福井 義松

北海道十勝郡浦幌農業補習學校助教諭二任ス

七級俸給與

大正十五年四月十五日

〔翻刻者注 日付文字の上に印影を示す正方形有〕

〔翻刻者注 日付文字の上に印影を示す正方形有〕

枠は朱欄外

第^朱四^黒六^朱號

第二二号^印

大正十五年四月三十日

浦幌尋常高等小學校長

成田 惣八郎

北海道十勝郡公立浦幌尋常高等小學校長之印

〔紫スタンプ〕
「受付印有」^印

票 結 完^{欄外}

浦幌村長 石原 重方 殿

職員居所通知ノ件

新任福井義松事當校宿直室ニ居住致シ候ニ付此段及御届候也

以上

完結票

村長^印 首席^印 主任^印 施行 完結

浦幌町立博物館

年報



Historical Museum of Urahoro

2022 (令和4) 年度事業報告
(2022.4.1~2023.3.31)

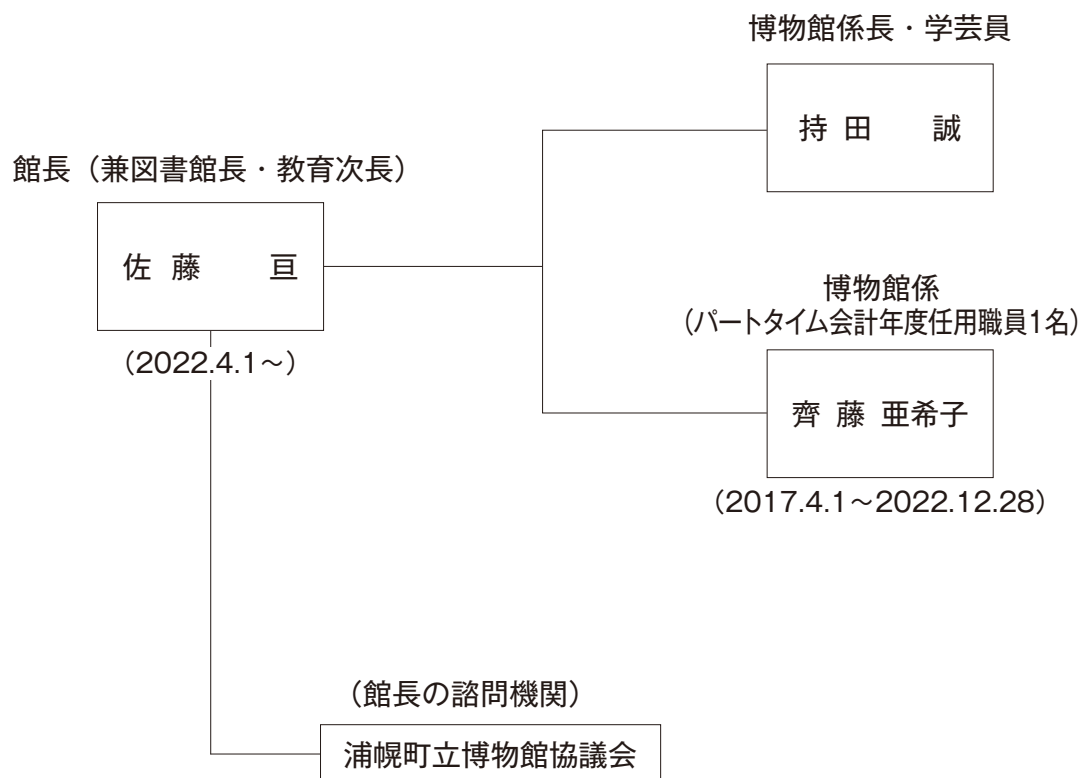
I. 博物館運営方針

令和4年度浦幌町立博物館運営方針

浦幌町の多様な歴史、自然、文化に関する資料と情報を幅広く収集・保全し、地域の財産として将来へ引き継ぎ、多方面で活用していくために、浦幌町立博物館は次のような活動を展開します。

1. 博物館法にもとづく登録博物館とすることで、浦幌町立博物館の果たす役割を明確化するとともに、社会教育法や博物館法にもとづく基本的な博物館機能の再点検や再構築をはかっていきます。
2. ホームページや博物館資料データベースを活用した、博物館情報のデジタル化やインターネット対応を進めます。
3. 浦幌を中心とする東十勝や白糠丘陵一帯の歴史、文化、自然史の研究拠点、情報発信拠点として、国内外の各種機関との連携や協力を推進します。
4. 収蔵資料の整理・登録作業、調査研究活動など、博物館活動の土台となる作業を重視した事業遂行に努めます。
5. 図書館との複合施設である当館のメリットを活かし、事業やレファレンス、地域資料の収集や、収蔵資料の有効活用、情報発信など、共同で推進できる体制の構築をはかります。
6. 停滞している東山防災倉庫の収蔵資料の搬出や吉野収蔵庫における資料整理活動を進めます。
7. 町内のさまざまな学術資源を、新規に文化財等として指定するとともに、それらの保全と活用をはかる取り組みを進めます。
8. アイヌ振興法の考え方にもとづき、ラポロアイヌネイションやアイヌ民族文化財団と連携して、アイヌ民族の歴史や文化を発信する活動に取り組みます。
9. 「国際博物館の日」や「文化財保護強調月間」「近代化遺産の日」などを軸に、全国の博物館や文化機関と連携した、多様な博物館事業を展開していきます。
10. 次世代へつなぐ博物館のあり方について議論し、課題を整理して将来に備えます。

II. 博物館の組織



令和4年4月1日現在

職名	氏名	住所	備考
会長	円子 紳一	北栄町2区	
副会長	西森 七枝	新 町	
委員	濱田 和光	住吉町1区	浦幌中学校長
〃	鈴木 洋孝	緑 町	浦幌小学校長
〃	春日 基江	北町2区	
〃	坂下 禮子	光 南	
〃	長谷川 みなみ	厚 内	
〃	香川 みどり	上 浦 幌	

(任期 令和5年12月18日まで)

III. 資料の受け入れ

博物館資料の新規受入件数 (2023年3月31日時点) 【2019年より暦年で表示】 (件)

内 訳	2016(平成28)	2017(平成29)	2018(平成30)	2019(令和元)	2020(令和2)	2021(令和3)	2022(令和4)
寄 贈	453	466	531	728	588	630	384
採 集	234	357	272	194	346	120	186
図書資料	315	312	291	445	370	468	430
合 計	1,002	1,135	1,094	1,367	1,304	1,218	1,000

IV. 資料の提供

収蔵資料の利用状況 (2023年3月31日時点) 【年度】 (件)

	2017(平成29)	2018(平成30)	2019(令和元)	2020(令和2)	2021(令和3)	2022(令和4)
特別利用(館外貸し出し)	4	1	5	5	8	2
特別利用(来館調査)	5	5	11	9	8	3
出 版 利 用	3	3	5	2	6	5
合 計	12	9	21	16	22	10

* 博物館活動、博物館紀要における調査研究利用・出版利用、一般報道使用をのぞく

V. 出版・広報活動

- 『浦幌町立博物館年報』第22号発行 (2021年11月30日)
- 『浦幌町立博物館紀要』第22号発行 (2022年3月31日)
 - ・ 論文、資料紹介4編を掲載
 - ・ 第16号より国際逐次刊行物番号 (ISSN) を付与 (ISSN 2189-4787)
 - ・ 年報と共に全国の主な大学、博物館、図書館へ発送。
- 『浦幌町立博物館だより』発行 (毎月1日発行)
 - ・ 町内および十勝・釧路管内の主な博物館、図書館等で配付。PDF版をホームページにて公開。
- 『広報うらほろ』に「博物館の窓」「アシーラ・レーラ」を連載
- 日本福音ルーテル帯広教会記念誌編集委員会(編) 『信仰の灯は永遠に：日本福音ルーテル池田教会と吉田康登牧師の足跡』〔浦幌町立博物館企画展図録〕発行 (2021年4月4日)

VI. レファレンス業務

レファレンス対応状況 (2023年3月31日時点) 【年度】 (件)

	2017(平成29)	2018(平成30)	2019(令和元)	2020(令和2)	2021(令和3)	2022(令和4)
来館・町内呼出によるもの	35	55	62	75	59	42
通信および他部局より転送	62	112	78	129	56	76
合 計	97	167	140	204	115	118

Ⅶ. 出前授業・研修派遣等

出前授業・研修派遣等 (2024年2月16日時点) 【年度】 (件)

	2017(平成29)	2018(平成30)	2019(令和元)	2020(令和2)	2021(令和3)	2022(令和4)
学 童 保 育 所	—	—	—	—	—	6
こ ど も 園	—	—	—	—	—	0
町 内 小 学 校	—	—	—	—	—	4
町 内 中 学 校	—	—	—	—	—	2
町 内 教 職 員 研 修	—	—	—	—	—	1
町 内 団 体 ・ 企 業 等	—	—	—	—	—	2
町 外 学 校 関 係 (大 学 以 外)	—	—	—	—	—	1
町 外 そ の 他	—	—	—	—	—	3
合 計	未分析	未分析	未分析	未分析	未分析	19

Ⅷ. 博物館ボランティア

博物館活動の一環として、博物館ボランティアによる活動がある。博物館ボランティアの業務は、①資料整理等の補助業務 ②新聞資料等の整理 ③博物館図書の登録と整理 ④簡易な展示解説 ⑤調査研究活動の補助 ⑥その他館長が適当と認めた業務等が想定されるが、本館では①～③業務を主に行い、他に古文書解読も行われている。現在の登録者は10名であるが、日常的に活動している者は6名である。

なお、古文書解読の成果は、「浦幌町立博物館紀要」第21号に掲載し第22号では休載した。

IX. 博物館の利用状況

(1) 博物館入館者の推移

(令和5年3月31日現在)

	2009(平成21)年度		2010(平成22)年度		2011(平成23)年度		2012(平成24)年度		2013(平成25)年度		2014(平成26)年度		2015(平成27)年度	
月	開館日数	入館者数	開館日数	入館者数	開館日数	入館者数	開館日数	入館者数	開館日数	入館者数	開館日数	入館者数	開館日数	入館者数
小計	299	7,990	302	8,471	307	10,012	309	9,648	305	10,403	305	10,045	305	11,161
累計	3,076	95,893	3,378	104,364	3,685	114,376	3,994	124,024	4,299	134,427	4,604	144,472	4,909	155,633
	2016(平成28)年度		2017(平成29)年度		2018(平成30)年度		2020(令和元)年度		2020(令和2)年度		2021(令和3)年度		2022(令和4)年度	
月	開館日数	入館者数	開館日数	入館者数	開館日数	入館者数	開館日数	入館者数	開館日数	入館者数	開館日数	入館者数	開館日数	入館者数
4	26	927	26	603	27	663	26	777	17	419	25	367	25	293
5	25	979	26	806	27	1,045	27	915	14	41	15	226	24	461
6	26	661	26	670	26	671	26	696	25	185	8	101	21	245
7	27	897	26	882	26	1,261	26	1,024	27	332	27	417	26	320
8	25	1,853	28	1,352	28	1,340	27	919	26	342	25	381	24	404
9	25	903	26	783	25	872	25	783	26	294	0	0	25	296
10	26	472	26	813	27	1,119	26	1,129	26	331	26	345	25	311
11	24	807	25	510	26	692	26	657	23	296	22	298	23	203
12	26	693	26	929	26	595	25	747	26	255	26	315	24	137
1	22	639	23	454	23	799	22	748	22	182	21	243	23	249
2	24	900	24	893	24	957	24	629	21	227	22	160	23	117
3	27	587	26	708	26	1,248	12	634	26	389	26	300	26	227
小計	303	10,318	308	9,403	311	11,262	292	9,658	279	3,293	243	3,153	289	3,263
累計	5,212	165,951	5,520	175,354	5,831	186,616	6,123	196,274	6,402	199,567	6,645	202,720	6,934	205,983

緊急事態宣言発令に伴う臨時休館 (2021年度は5/19～6/20および8/30～9/29)

(2) 団体入館者 (事前申込みしくは当日解説対応を実施した団体・個人 / 3月31日現在)

4月 5日 浦幌学童保育所	37名	10月 18日 帯広要約筆記サークルたんぼぼ	12名
4月 9日 十勝うらほろ楽舎	12名	10月 23日 帯広市西小地区生涯学習推進委員会	49名
5月 12日 北海道中小企業家同友会	5名	11月 15日 帯広市生涯学習愛国小地区委員会高齢者部会(愛国長寿会)	16名
6月 15日 認定こども園(ぼんだ組)	21名	12月 21日 十勝東部社会教育主事会	5名
6月 16日 浦幌小学校2学年	29名	1月 13日 浦幌学童保育所	27名
6月 21日 認定こども園(ぼんび組)	14名	1月 25日 十勝うらほろ楽舎	12名
7月 17日 ひがし大雪自然館	15名	2月 22日 上浦幌中央小学校	4名
7月 20日 帯広身体障がい者協会婦人部	23名	3月 16日 浦幌高校1期生	10名
8月 11日 千葉大学	6名	3月 17日 兵庫教育大学	4名
8月 26日 音更町高齢者大学	18名	3月 22日 認定こども園	28名
9月 14日 浦幌小学校第2学年	16名	3月 24日 認定こども園	28名
9月 27日 うらほろボランティアいちげの会(炭鉱見学)		合計	24件 397名
9月 27日 幕別町民生児童委員西南部会	6名		

(令和5年3月31日現在)

2022（令和4）年度 博物館教育普及事業報告

分類	領域	No.	事業名	事業概要	期 日	来場者または参加者数	備 考
展 示	企画展	1	トピック展「コロナな時代を語り継ぐために2022」	新型コロナウイルスで変化した暮らしの記録。	3月1日～5月8日	未計数	
		2	アイヌ伝統文化作品展	ラポロアイヌネイション主催のアイヌ刺繍教室の受講生が製作作品を展示。	4月13日～5月8日	138名 (記帳者のみ)	ラポロアイヌネイション共催
		3	かし和家の歴史展	創業94年の歴史を終え、若手の後継者により新たな歴史を歩みはじめる浦幌駅前のソバ屋かし和家に関する資料の展示。	5月21日～7月18日	220名 (記帳者のみ)	
		4	アイヌ民族の現在「ラポロアイヌネイション」展	ラポロアイヌネイションを通じて、アイヌ民族のいまを伝える。	7月30日～9月25日	292名 (記帳者のみ)	ラポロアイヌネイション・北海道立北方民族博物館共催
		5	北海道の災害と文学展	北海道で起きた主な災害と、それらを舞台に描かれた文学作品について解説するパネル展。北海道立文学館パネル展を巡回展示で開催するもの。	7月30日～8月14日	105名 (記帳者のみ)	北海道立文学館・浦幌町立図書館共催
		6	北村薫氏写真展	音別の写真家、北村薫氏の写真展。	10月12日～11月5日	107名 (記帳者のみ)	
		7	帯広百年記念館移動展「アイヌ文化パネル展」	帯広百年記念館の収蔵する資料や作品の移動展覧会。	11月9日～11月27日	60名 (記帳者のみ)	帯広百年記念館運営連絡協議会主催
		8	巡回展「学ぼう北方領土とかち巡回パネル展」	北方領土の歴史、日ロ交流事業の歴史など、北方領土問題を基礎から知るためのパネル展。	11月27日～12月9日	12名 (記帳者のみ)	千島歯舞居住者連盟十勝支部主催
		9	厚内の博物学者「和歌山満」展	中学校の理科教員にして、天体観測、貝類研究など、地域の自然史調査を永年続けてきた和歌山満氏の資料や標本を展示。	12月10日～1月15日	124名 (記帳者のみ)	
		10	トピック展「クリスマスの文化」	日本ではなじみの薄いクリスマスの文化について、旧日本福音ルーテル池田教会の資料を中心に展示。	12月10日～12月28日	未計数	
		11	トピック展「お正月の文化」	お正月にみられる飾り物や料理などについて紹介。	1月7日～1月29日	未計数	
		12	全国孔版画年賀状展	十勝孔版画の会による毎年恒例の孔版画年賀状作品展です。	1月26日～2月7日	48名 (記帳者のみ)	浦幌孔版画サークル主催・浦幌町文化協会後援
		13	ぼくの、わたしの、書き初め展	書道教室「もみじ子会」に通う子供たちの書き初め作品を展示。	2月11日～23日	122名 (記帳者のみ)	共催：もみじ子会
		14	ひな人形展	収蔵資料のひな人形を公開。	2023/3/1～3月19日	未計数	
		15	北の縄文展in浦幌	釧路市と網走市で開催された「北の縄文展」から浦幌と関係の深い遺跡のパネルを選んで紹介するとともに、日頃は収蔵庫に保存されている各遺跡の資料を一部公開する。	2月18日～3月26日	未計数	主催：北海道/共催：浦幌町立博物館
		16	岡田愛啓写真展「原生花園の花」	岡田愛啓氏が撮影した豊北原生花園に咲く植物たちの写真展。	2023/3/25～4・23	183名	
教 育 普 及	夜学講座	17	「フラワーソン2022」に参加しよう	6月に開催されるフラワーソンの説明会。	4月20日	13名	講師：持田誠学芸員
		18	国際博物館の日記念講座「博物館の力」	70年ぶりの博物館法改正と、30年ぶりに登録博物館となった浦幌町立博物館という機会に、博物館法にもとづく当館の活動内容をみなおす。	5月18日	16名	講師：持田誠学芸員
		19	かし和家の歴史	浦幌駅前のそば屋かし和家の系譜を紹介。	6月1日	12名	講師：持田誠学芸員
		20	実は自然の少ない十勝・浦幌から、生物多様性を考えよう	生物多様性保全国家戦略や生物多様性基本法をもとに、十勝や浦幌の自然環境がいまどのような状況かを解説する。	10月13日	8名	講師：持田誠学芸員
	博物館講座 (含うらほろスタイル ゼミナール)	21	図書館記念日講座「なぜ本の仕事をしているんだろう。-十勝の活動事例から-」	図書館法制定を記念した図書館記念日に、書店や図書館など本に関する仕事を手がける長谷川氏から、本のいまについて解説。	4月30日	40名	講師：長谷川彩氏
		22	企画展関連講座「なぜ博物館はかし和家を調べるのか-風俗史の視点から-」	かし和家の資料を集め研究することで何が明らかになるのか？風俗史の視点から紹介する。	7月2日	21名	講師：持田誠学芸員
		23	文学館出前講座「災害と文学」	文学は災害をどのように描いてきたのか。道立文学館の資料から解説。	8月6日	9名	講師：苔名直子学芸員（北海道立北方民族博物館）
		24	企画展解説「アイヌ民族の現在：ラポロアイヌネイション」	昨年に網走市の北海道立文学館で開催された企画展「アイヌ民族の現在：ラポロアイヌネイション」展を通じて、アイヌのひとびとの「いま」を伝える。	8月20日	中止	講師：野口泰弥氏（北海道立北方民族博物館学芸員）

IX. 博物館の利用状況

分類	領域	No.	事業名	事業概要	期 日	来場者または参加者数	備 考
教育普及	博物館講座 (含うらほろスタイル ゼミナール)	25	博物館講座「アイヌの権利問題に取り組む弁護士として」	先住権の問題を中心に、アイヌ施策振興法の時代、アイヌの人々の先住民族としての権利をどう考えるか、永年取り組んできた弁護士の視点から解説する。	9月10日	29名	講師：市川守弘氏（市川法律事務所弁護士）
		26	博物館実習生発表会	博物館実習生に自らの研究内容などについて発表してもらう。	9月18日	9名	講師：博物館実習生
		27	地球上で最も重要なイネ科植物を知ろう	食料や各種資源植物として、人類に非常に身近なイネ科植物は、分類形質が細かく、一般に名前の調べ方がわかりづらい植物とされている。最近の日本のイネ科植物の分類学的研究の動向を紹介する。	1月15日	31名	講師：佐藤広行氏（九州大学総合研究博物館研究員）
		28	卒業論文大発表会「浦幌のヒグマこんなに調べました！2023」	ヒグマをテーマに卒業論文や修士論文に取り組む大学生・大学院生たちに、フィールドである浦幌で自らの研究成果を発表してもらう。	2月11日	54名	講師：大学生・大学院生・佐藤喜和氏（酪農学園大学教授）
		29	浦幌町指定有形文化財厚内神社絵馬について	2021年12月に浦幌町の有形文化財に指定された厚内神社絵馬について、文化財保護法制度のしくみ、厚内神社の歴史とからめて解説する。	2月18日	14名	厚内公民館・社会教育係共催
		30	縄文世界遺産と浦幌の縄文	世界遺産となった北東北の縄文世界遺産や浦幌町内から確認されている縄文時代の遺跡・遺物などについて、特徴や意義を解説する。	3月18日	17名	講師：村本周三氏（北海道教育委員会）
	町民座談会	31	和歌山先生を語ろう	企画展関連講座として、厚内を拠点に自然史研究を続けてきた和歌山満氏の思い出を語り合う。	12月11日	9名	
		32	お正月の文化を語ろう	いとむかしのお正月文化の違いなどについて自由に語り合う。	1月	4名	
	夏休み子ども博物館	33		学童保育所出前授業を実施		-	協力：浦幌学童保育所
	冬休み子ども博物館	34		学童保育所出前授業を実施		-	協力：浦幌学童保育所
	移動講座	35	<月例調査観察会> 豊北植物調査会	毎月1回豊北原生花園を歩き、植物のフェノロジー（生物季節観測）を調査・記録する。	5月～11月 毎月1回	41名	
		36	<移動博物館> 知っとこ！うらほろ	浦幌町の姿を知るための史跡や自然めぐり。	4月2日	3名	講師：持田誠学芸員
		37	<移動博物館> ウラボロイチゲ観察会	日本では浦幌で最初に発見された植物ウラボロイチゲの自生地を巡って観察する講座	4月28日	11名	講師：坂下禮子氏
		38	<移動博物館> ウラボロイチゲを守ろう	道路工事の影響で失われるウラボロイチゲを隣接地へ移植して保全する。	5月4日	25名	講師：坂下禮子氏
		39	<移動博物館> 青い鳥を探そう	夏鳥オオルリの美しい姿を、木々の葉が茂って観察しづらくなる前の初夏に観察する	5月8日	22名	講師：春日基江氏
		40	<移動博物館> 知っとこ！うらほろ	浦幌町の姿を知るための史跡や自然めぐり。	6月4日	8名	
		41	第6回北海道フラワーズ2022	5年にいちど、全道一斉に野生植物の開花状況を調べる。	6月18日～ 19日	23名	北海道新聞野生生物基金主催
		42	<移動博物館> JRヘルシーウォーキングをあそぶ	今年から設定されたフットパスコース「JRヘルシーウォーキング」をみんなで歩く。	7月16日	中止 (天候状態)	
		43	<移動博物館> ウチダザリガニバスターズ	特定外来生物に指定されているウチダザリガニを捕獲し、生態系を保全する重要性を学ぶ。	7月31日	中止 (天候状態)	浦幌の自然を楽しむ会共催
		44	<ふるさと探訪> イチャルパ	浦幌へ還り再埋葬されたアイヌ民族の遺骨を慰霊する「イチャルパ」を見学する。	8月21日	未計数	ラポロアイヌネイション主催
		45	<ふるさと探訪> アシリチェブノミ	サケ漁をはじめるにあたって神に祈りをささげるアイヌ民族の儀礼「アシリチェブノミ」を見学する。	9月11日	未計数	ラポロアイヌネイション主催
		46	<移動博物館> オオアワダチソウをどどん抜くぞ！	豊北原生花園内に増加してきている侵略性の高い外来植物オオアワダチソウを抜き取り駆除する活動。	9月17日	中止 (天候状態)	
		47	<ふるさと探訪> 列車で学ぶ地理・歴史	列車を活用した鉄道遺産と地理歴史巡検	10月22日	18名	
		48	<移動博物館> 秋の渡り鳥観察会	マガンやオオヒシクイ、ハクガンやシジュウカラガンなど、この時期にみられる渡り鳥を探して観察する。	11月3日	10名	講師：春日基江氏
	49	<移動博物館> 春の渡り鳥観察会	マガンやオオヒシクイ、ハクガンやシジュウカラガンなど、この時期にみられる渡り鳥を探して観察する。	3月19日	3名	講師：春日基江氏	
	ロビーコンサート	50	クリスマスの讃美歌をうたってみよう！	日本ではなじみの薄い讃美歌を歌う。	12月18日	9名	
	ラポロアイヌネイション共催	51	「初心者アイヌ文様刺繍講座」	アイヌ文様刺繍について、その独特の技法を伝承者から学ぶ連続講座	不定期	-	講師：廣川和子 ラポロアイヌネイション共催

X. 学芸員の執筆活動・依頼講演・社会活動等

1. 共同研究等

- ・浦幌町内における特定外来生物ウチダザリガニの実態に関する調査（浦幌の自然を楽しむ会）
- ・釧路国境地域の植物相に関する研究（釧路市立博物館）
- ・環境省モニタリングサイト1000水生植物調査（環境省、国際湿地保全連合、釧路市立博物館、新潟大学ほか）
- ・別海町の湿原植物相調査（釧路市立博物館、別海町教育委員会ほか）

2. 論文・記事

- ・大津・十勝川学会編集，十勝川物語-歴史・文化・人-，サッポロ堂書店発行（2022年），うち3節を担当執筆。
- ・持田誠，2022，コロナ関係資料の収集と博物館の役割，全科協ニュース，52（6）：8-9。
- ・持田誠，2022，浦幌町指定文化財厚内神社絵馬，文化情報，（391）：1。

3. 口頭発表・ポスター発表

- ・博物館法改正をめぐる国会審議における焦点の整理，第60回北海道博物館大会 2022年7月14日 北海道博物館協会
- ・浦幌町厚内の博物学者「和歌山満」について，北海道自然史研究会2022年度研究大会 2023年2月19日 北海道大学総合博物館

4. 依頼講演等

- ・「ラポロアイヌネイションのこれまでとこれから」2022年5月21日、北海道立北方民族博物館（網走市）。
 - ・「アイヌ文化を支える植物 -北海道の草木はいまどうなっているか?-」2022年8月9日、アイヌ文化普及啓発セミナー（アイヌ民族文化財団主催）、（札幌市）。
- ※なお、同名の講座を8月24日に東京都内で開催予定だったが、学芸員が新型コロナウイルスに感染したため中止となった。
- ・「東十勝の植物多様性」2022年12月15日、市民マイスター講座，市民活動プラザ六中（帯広市）。
 - ・「浦幌川流域の地理的特徴」2023年1月25日、十勝うらほろ楽舎研修会，浦幌町立博物館。
 - ・「上美生を走った砂糖鉄道の話-」2023年2月2日、芽室町図書館講座（芽室町）。
 - ・「十勝の観光文化検定特別セミナー」2023年2月5日、帯広商工会議所（帯広市）。
 - ・「外来植物に関する問題」2023年2月9日、オンネトー地区道路環境保全会議（足寄町役場）。
 - ・「自然からみた十勝川物語」2023年2月25日、大津十勝川学会研究会，十勝プラザ（帯広市）。

投稿要領・執筆要領

浦幌町立博物館では、『浦幌町立博物館紀要』への投稿者を募っています。投稿範囲は、浦幌・十勝並びに北海道を含む北方圏に関する論文、短報、資料紹介、新産地情報、調査・観察記録などです。

投稿は随時受け付けておりますので、投稿希望の方は、当館へご連絡下さい。

投稿者への別刷りは、50部までは無料です。それ以上の印刷については著者負担とします。

なお、投稿原稿は紀要に掲載後、インターネット上で全文を公開します。投稿にあたっては、公衆送信権を含む著作権を当館に帰属して頂きます。

執筆にあたっては、以下の投稿要領・執筆要領を参照の上、原稿を作成ください。

1 投稿要領

<提出方法>

原稿は手書きまたはパソコンで受け付けます。投稿の際は、別紙に氏名・タイトル・連絡先を明記して下さい。

手書き原稿の場合は、縦書き・横書きのいずれも400字詰め原稿用紙を使用して下さい。

パソコン原稿の場合は、テキスト形式もしくはMS-Word形式で保存したデータを、打ち出し原稿と共に送り下さい。

データでの提出は、USBメモリもしくはCD-Rで送付下さい。電子メールでの提出にあたっては、投稿用のメールアドレスを別途指示しますので、事前にご連絡ください（博物館の代表アドレスでは受け取れませんのでご注意ください。）

原稿は「紀要原稿在中」と赤書きの上、下記の浦幌町立博物館宛に提出ください。

〒089-5614

北海道十勝郡浦幌町字桜町16-1 浦幌町立博物館

電話：015-576-2009

2 執筆要領

<言語>

本文は和文に限ります。ただし、タイトル、氏名、所属には英語表記を御用意ください。また、英文アブストラクトを付ける事もできます。

学名、欧文用語および数字は半角文字で記し、句読点はそれぞれテン全角（、）および全角マル（。）とします。

<引用文献>

文献は、原則として本文中に引用した文献のみをとりあげ、和文、欧文を含めて著者名のアルファベット順に配列して下さい。

本文中での引用は（持田・加藤2001a; 持田2002）、持田ほか（2001）、(Mochida & Kato 1995, 2001b, c)、Mochida et al. (1997)を原則とします。なお、縦書きの場合は、原則として漢数字で表記下さい。

(例) 持田誠 (二〇一五 a)

下記の表記例を参考にして下さい。

a. 論文の場合は、著者名. 発行年. 表題. 掲載雑誌名 巻(号): ページ. と表記する。

(例) 上赤博文. 1995. 田手川の植物群落と植物相. 佐賀自然史研究 1(1): 5-16.

b. 単行本の場合は、著者名. 発行年. 書名. ページ数. 発行所, 発行地. と表記する。

(例) 伊藤秀三. 1994. 島の植物誌. 246pp. 講談社, 東京.

c. 単行本(分担執筆)の一部を引用する場合は、著者名. 発行年. 章名. 本の編者名, 書名. 章のページ. 発行所, 発行地. とする。

(例) 長田芳和. 1997. ニッポンバラタナゴ. 長田芳和・細谷和海(編), 日本の希少淡水魚の現状と系統保存一よみがえれ日本産淡水魚一. pp.76 - 85. 緑書房, 東京.

<脚注>

脚注は本文末にまとめて記述します。表記は(註1)の形式とします。本文中では下記のとおり表記して下さい。

(例) …と考えられている(註1)。

<図表と説明文>

図表番号は写真も含めて図1、表1とします。

図版、写真、表は、本文へ貼り付けず、1点ずつ別途お送り下さい。また、図版データはJPGで、表データはエクセルの形式で提出願います。

図は図表、図版とも完全原稿とし、余白または裏に著者名、番号、天地を明記して下さい。また、本文の打ち出し原稿の右余白に図の挿入位置を書き込んで下さい。ただし図版の説明文(キャプション)は図版にはめこまず、図表番号と説明文を別紙A4用紙に記入して下さい。図表の説明文には英文を併記することができます。

(2016年3月制定)

浦幌町立博物館紀要 第24号

ISSN 2189-4787

発行日 2024年3月31日

編集・発行 浦幌町立博物館
〒089-5614 北海道十勝郡浦幌町字桜町16番地1
電話 015-576-2009 FAX. 015-576-5834 (図書館)

印刷所 大同出版紙業株式会社
〒080-0017 北海道帯広市西7条南6丁目2番地
電話 0155-23-5107 FAX. 0155-23-9032